

平成 30 年度 宇都宮大学 卒業論文

大学生の「望ましい自立」に向けた自立過程の検討

教育学部 総合人間形成課程 地域公共領域 4年

141648A

古堀 晴菜

社会学研究室

指導教諭 小原一馬先生

目次

はじめに.....	2
第1章 現代の若者が抱える問題と「自立」.....	4
第1節 現代の若者の自立不全.....	4
第2節 「成人期への移行」.....	10
第1項 「成人期」の前段階の「青年期」.....	10
第2項 「成人期への移行」.....	11
第3項 「成人期への移行」を構成する一部としての「ポスト青年期」.....	12
第3節 「自立」の定義.....	14
第1項 日本の家族規範と親子共依存.....	15
第2項 自立過程における望ましい親子関係.....	16
第4節 第1章のまとめ.....	18
第2章 アンケート調査の分析.....	20
第1節 調査方法.....	20
第2節 アンケートの分析.....	20
第1項 「親からの自立」から見た自立.....	28
第2項 「情緒的人間関係」から見た自立.....	48
第3項 「居住形態」から見た自立.....	53
第4項 性格と性別による自立の差.....	60
第5項 総合的な自立度における相関と疑似相関.....	72
第3節 調査結果.....	76
第3章 大学生の望ましい自立に向けて.....	81
第1節 大学生が思う望ましい自立の姿.....	81
第2節 大学生の自立達成に向けて.....	85
おわりに.....	88
謝辞.....	89
参考文献参考 URL.....	90
調査資料（質問紙）.....	92

はじめに

近年、進学も就職もしない、あるいはパートタイム労働やアルバイトのみで働き、自立しない若者が問題視されている。NHK ドキュメンタリーやNHK スペシャルなど、NHKで放送・公開された番組やweb記事のうち、フリーターに触れている内容のものは163件、ニートに触れている内容のものは111件にのぼり、自立しない若者の問題が注目されていることがわかる。また、「働かないふたり」や「サルチネス」、「NHKによろこそ！」などのように、ニートやフリーター、引きこもりの若者を主人公とした漫画やアニメ、ドラマが数多く見受けられ、若者当人たちにとってもこれらの言葉は身近なものとなっている。さらに、親離れや子離れの問題に触れつつ、日本家族は親子依存の傾向や家族固執の傾向があると主張する「家族という病」や「子は親を救うために「心の病」になる」などの書籍がベストセラー入りしており、家族問題の一つとして自立の問題は世間の注目を集めている。親離れできないという意味を含め、自立しない学生もまた問題視されている。ベネッセ教育総合研究所の調査によれば、近年、親の意見に従ったり、何かあれば親が助けしてくれると考えたりする大学生が増加し、その割合が、自分で決めたり解決したりすると考えている大学生を上回る結果が出ている。また、学生生活について「学生の自主性」よりも「教員の指導」を重視し求める現状があるという結果が出ており、大学生の自主性が乏しいという問題が指摘されている。

私自身、大学1年生頃までは父親や祖母と特に仲が良く、何に対しても考えを聞いたり、買い物ひとつのためだけでも一緒に外出したりしていた。友人の反抗期をうかがわせる発言や距離のある親子関係の話を書くたび、距離感の近い父や祖母との関係に安堵し、誇らしくも感じていた。しかし、実家を離れ家族と空間的距離をとったことや、尊敬できる大人との出会いから影響を受けて自分なりの価値観が形成されてきたことで、自身の家族との距離感を見つめなおす機会を得た。それから徐々に親と同じ考えや親に良く思われるだろう考えを意識しなくなり、実家を離れたことで自分の生活は全て自分でやりくりするようになり、未熟ながらも精神的・生活的に自立したように感じている。また、家族構成が変化したという事情もあるが就職を待たず経済的にも完全に自立し、自身が一人の大人として地に足をつけつつあると感じている。しかし、友人と話をすると、「成人したから自立しなきゃ」「就職したら自立する」や、「一人暮らしして自立する」「仕送りもらってるうちは子どもだよ」など、自立の時期や何をもって自立しているかと判断するかが人によって異なることがうかがえる。私自身も自立について曖昧なとらえ方をしていたため、いくつかの環境の変化がなければ世間で指摘される「親離れできない大学生」のまま学生生活を終えていたかもしれない。

以上のように、社会において自立の様々な問題が指摘され注目を受ける中、自身の自立観や周囲の人の自立観それぞれに違いや曖昧さを感じた。実感としての自立が、成人を迎えた途端に一斉に自立するという単純なものではなかったことから、卒業し、学生期間を終えた

途端に自立するというものでもないと考えられ、現在の大学生の自立過程が学卒後の自立にも影響を及ぼすと予想できる。では大学生は、何をもって自立している、あるいは自立に近づいているとし、どのようにして自立不全の問題を回避すれば良いのだろうか。本論では、大学生はどのような自立を理想とし、現状は自立過程のどのあたりに位置しているのか、また学卒後の自立に向けてどのようなことを意識して自立過程を進めば、問題を抱えることなく自立できるのかについて考えていきたい。

第1章 現代の若者が抱える問題と「自立」

第1節 現代の若者の自立不全

本節では、現代の若者に指摘される自立不全が具体的にどのような問題であるかについて述べていく。

岩上（2010）によれば、「若者」とは10代から30代までの広い年齢層を含んでいる。本論は若者の中でも、大学生の自立がどのように進んでいるのか調査を行っている。従来、若者論において若者の自立が問題視され、大学生が「学校期から卒業、就職の時期」として論考の対象に位置してきたことから、本論においても大学生を「若者」という言葉に含めて扱うこととする。

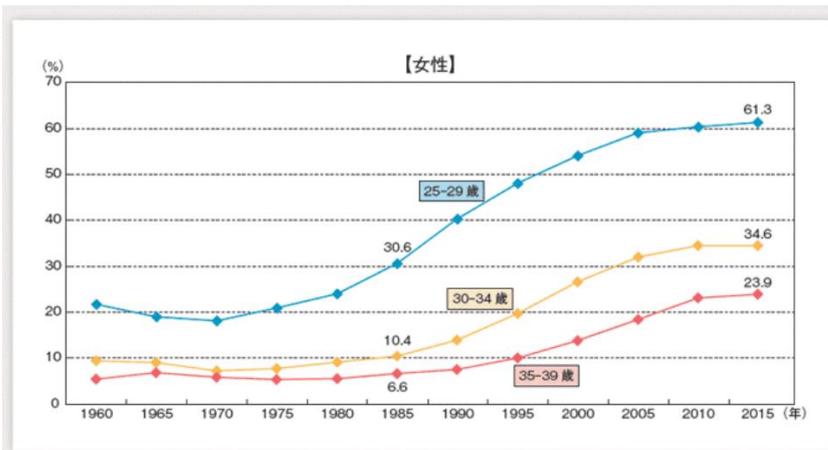
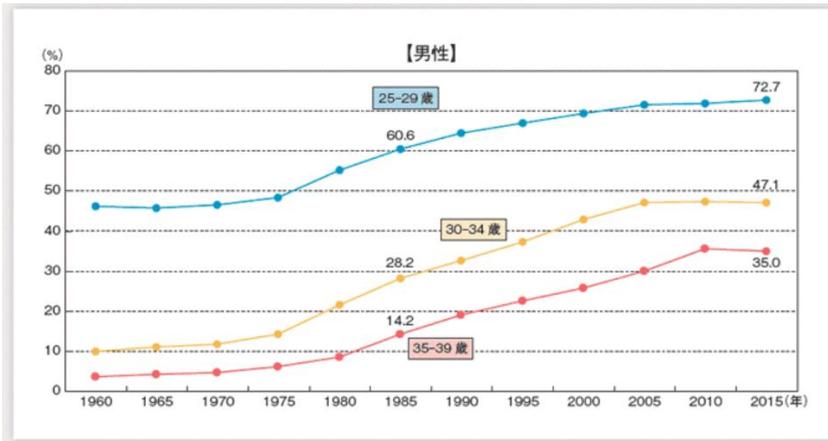
近年、親から独立しない若者や、安定的な雇用を得られない若者、自ら社会との関わりをもたない若者など、若者の自立に関する問題が社会的な関心を集めている。こういった若者の自立問題を受けて、学卒後もなお親と同居し基礎的生活条件を親に依存している未婚者を示す「パラサイト・シングル」（山田 1999）や、上記の若者の発達時期を示す「ポスト青年期」（宮本、岩上 1994,2004）といった新たな概念や、「フリーター」「ニート」「ひきこもり」という用語が生み出された。以下に、若者の自立問題の具体例として、未婚化、フリーター問題といった大きく二つの問題について述べる。

「未婚化」とは、未婚の若者・未婚の親元同居者の増加のことであり、少子化にも直接的影響を及ぼす問題である。若者の未婚率は1990年前後から急増し、2010年の国勢調査からはおおむね横ばいで推移しているものの、男性では72.7%、女性では61.3%という高い数値が示されていることから、近年も問題が進展していないとわかる（図表1：25-29歳）。親と同居する若年未婚者（20-34歳）を見ると、1990年以降増加の一途を辿り、実数は2003年にピークに達しその後減少しているものの、割合は2012年の48.9%でピークに達するまで増加傾向であった。2016年には実数、割合ともに前年から減少傾向にあるが、割合45.8%は決して低い数値ではない。また、実数が最も多かった2003年において、親と同居する若年未婚者のうち家事を家族任せにしているという者の割合は91.3%であった（内閣府「若年

層の意識実態調査」2003)。単に未婚の若者が増えたのではなく、親元同居かつ身の回りの生活を親に助けてもらう未婚の若者が増えたことから、若者の未婚化増加には家族背景も影響すると考えられる。

岩上によれば、「未婚化問題は、未婚期が長期化することが問題であることはもちろん、若者がいつまでも親の家（＝自分の家）で生活を続け、親もまた子の世話を焼き続ける、という依存的な親子関係も問題である」という。かつては、長く日本の親族システムが支持してきた規範だったことから未婚の若者が親元にいることは当然のことと受容されていた。しかし60年以降、子どもは成長して一定の年齢になれば親元を離れて「独立」すべきだという夫婦家族制の規範もまた広く受容されたことで、従来の家族規範は全面的に肯定されるわけではなくなったという。つまり、伝統的な日本の家族文化の中では当たり前とされてきた未婚者の若者の親元同居が、新たな家族制度を受けて依存的な親子関係というように問題視されるようになったことから、親元同居の問題のとらえ方には異なる文化の衝突という視点があるとわかる。よって、育った家の家族観が親元同居期間の長期化に大きな影響を与えていると考えられる。

また、岩上によれば、当初はこの問題について、「結婚を引き延ばしている」「いつまでも親元に居残っている」困った若者という、若者本人の自覚の欠如を指摘する見方も強かった。しかし、未婚化は結婚への志向性の問題のみにとどまらず、若者の就職困難の問題と密接に関連することが認識され始め、次第に格差議論などとも結び付いて、家族的背景、地域、ジェンダーとの接点をもつようになったようだ。つまり未婚化問題は、若者自身の結婚観はもちろん、家族関係や後に述べるフリーター問題のような結婚そのものとは別の要因にも影響を受けているということになる。たとえば、フリーターであるから所帯を持てるほどの経済力がなく未婚であったり、より安定した生活を求めて仕方なく親元同居をし、それを親が許していたりするといったことが考えられるということだ。



【図表 1】 資料：総務省「国勢調査」、出所：内閣府



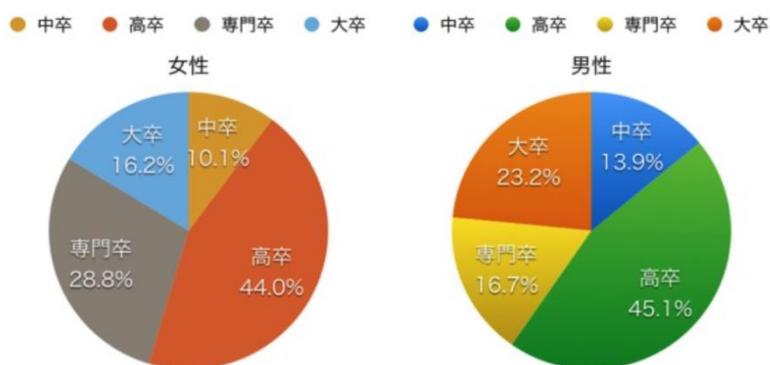
【図表 2】 資料：総務省統計局「労働力調査」、出所：「親と同居の未婚者の最近の状況 2016」

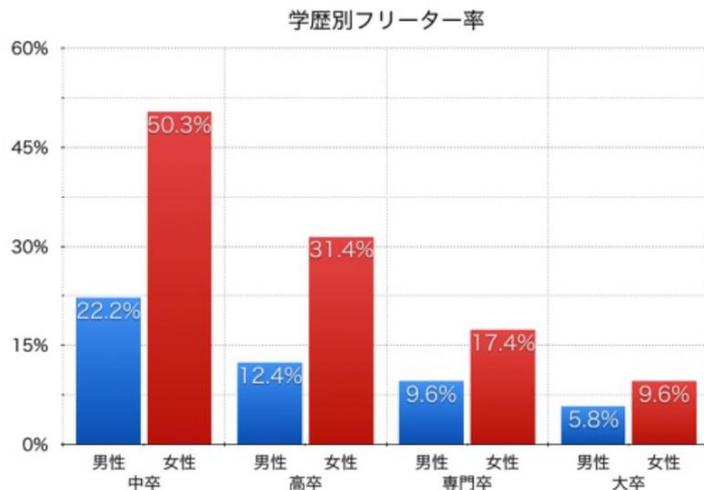
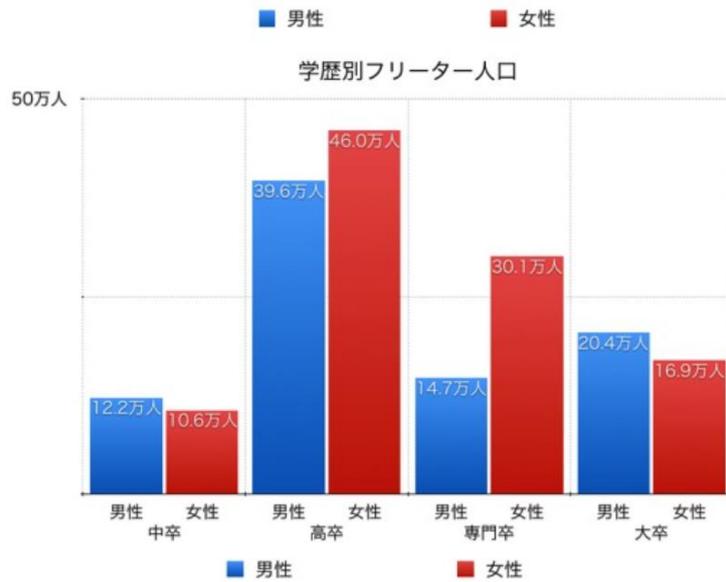
一方「フリーター」とは、中学校卒業後の年齢 15 歳から 34 歳で在学していない者のうち、①就業している者については、勤め先における呼称が「アルバイト・パート」である雇用者②無業の者については、家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事を希望する者、の条件を満たす者を指す（厚生労働省 1991）。

フリーター議論ははじめ、80 年代バブル期の経済のだぶつき状況の影響を受けて、モラトリアムとしての「自由な」働き方を選択する「新しいタイプの若者たち」（就職情報誌『フロムエー』道下 1987）という扱いだっただ。岩上（2010）によれば、2000 年代に入る頃にフリーター議論は、若者は「甘えている」「働く意欲が乏しい」「困ったものだ」というものから社会の構造的な問題、政策議論の必要性、グローバル化の影響、政策的措置への要請へと、若者の雇用を中心とした議論へと急速に論調が移っていった。成人期入り口での「就職」問題の一環としての若者フリーターの問題は、グローバル化のなかで生じる先進社会の必然的な構造変動とそれへの社会的対応の必要性という認識が広がった。つまり正規雇用を得られない、もしくは仕事をしないことについて、若者自身の勤労意欲や能力の有無を要因とするという認識から、企業の採用体制など若者を取り巻く環境や社会構造も要因とするという認識に変化したということだ。

このフリーター問題は、大学生にとって決して無関係な問題ではない。以下に示す平成 24 年版『就業構造基本調査』によれば、フリーターの学歴構成のうち大卒の割合は男性で 23.2%、女性で 16.2%、大卒のフリーター率は男性で 5.8%、女性で 9.6%である（図表 3、4、5）。また、文部科学省『学校基本調査』によれば、学部卒業生のうち非正規職の者、フリーター、無職の者が占める割合は平成 24 年の 22.9%から平成 29 年には 12.6%に減少しているものの、8 人に 1 人が正規の職業に就けないと考えれば、正規雇用を得られない、もしくは仕事をしないという状況は現在においても大学生にとり身近な問題であると考えられる。

フリーターの学歴構成





【上から 図表 3、4、5】資料出所：平成 24 年版「就業構造基本調査」

ここまで自立を上手く達成できない若者に関する問題を述べてきたが、以下に示す国勢調査のデータからもわかる通り 90 年代前後から親元から独立しない若者が増加し(図表 6、7、8)、具体的な社会問題として若者が結婚し所帯をもたないことや、定職や正規雇用の職に就けないことが問題視されていることがわかった。大卒者でも問題を抱える者の割合が少なくないことから、大学生にとって自立不達成にともなう諸問題は決して無関係でないこともわかった。また、親から独立しない問題のとらえ方が若者の志向に向く単純なものから、若者を取り巻く環境や社会構造に向く複雑なものに変化していることがわかった。

	総数 【世帯】	両親と同居 【世帯】
全国	23,594,354	20,068,162
全国市部	18,488,897	15,640,700
全国郡部	5,105,457	4,427,462

(1990 : 平成 2 年国勢調査)

	総数 【世帯】	両親と同居 【世帯】
全国	23,498,519	19,576,178
全国市部	18,540,941	15,354,260
全国郡部	4,957,578	4,221,918

(1995 : 平成 7 年国勢調査)

	総数 【人】	両親と同居 【人】
全国	39,076,748	32,623,966
全国市部	30,768,749	25,507,170
全国郡部	8,307,999	7,116,796

(2000 : 平成 12 年国勢調査)

【上から 図表 6、7、8】資料出所：国勢調査

さらに、岩上（2010）は「就職困難期になって以降、雇用の問題に特化して議論されてきた経緯もあるが 90 年代以降の 20 年間にわたる議論の過程で、この時期（若者が自立し成人へと変化する時期）とそこに存在する問題の捉え方には、従来の「青年期」論にはない視点が多く入ってきた」として、問題のとらえ方にも変化が起こっていると述べている。

以下では、若者が成人へ向かう時期とその時期の若者が抱える問題が、先行研究においてどのような概念でとらえられているのかについて述べていく。

第2節 「成人期への移行」

若者問題に挙げられている若者は、ライフコース論では学卒、就職、経済的独立、離家、結婚（親になる）などを経験する時期と想定されており、「成人期への移行」の時期として定置されている（岩上 2010）。本節では、若者が成人へ向かう時期のとらえ方として「成人期への移行」とは何かについて述べていく。

第1項 「成人期」の前段階の「青年期」

本項では、「成人期への移行」という用語が用いられるようになる以前に若者の発達時期をとらえる概念として用いられていた「青年期」とは何かについて述べる。「青年期」という概念は発達心理学に基づくものであり、青年期問題はエリク・H・エリクソンやロバート・J・ハヴィガースら人間発達研究者により理論的に展開された。青年期は児童期と成人期に挟まれた発達段階にあり、固有の発達課題を有するとされており、一般的には「大人への準備期」とみなされ、10代半ばから20歳前後と想定されていた。

この時期はライフコースにおいて「子ども」と「大人」という確立された人生段階に差し挟まれた時期であり、社会の構造では、子どもであることの特権はもうないが、大人としての権利も十分ではない時期として同定され、個人のライフコースでも社会の構造でも、「マージナル・マン（周辺人）」と認識されている。代表的なライフコース研究者の一人であるジョン・クローセンは青年期について以下のように述べている。

近代社会では、経済的に独立し、社会で有用な役割を果たし、結婚して次世代に責任をもつ、という大人としての目標が明確であった。そのため青年期とはつまり、学校と遊びの間を行ったり来たりしていた子どもが、この目標を達成し、一人前＝成人になる人生設計をはじめめるための準備期間であると言える。

つまり、大人を指す「成人期」という人生段階の前段階に位置する時期が「青年期」として認識され、人間は子どもの時期を終えると青年期の中で学卒、就職して経済的自立を図り、さらに結婚するという一連の目標達成を経て成人期を迎える、という段階的な考えが用いられていたことがわかる。

しかし20世紀後半には、高等教育普及による高学歴化に伴う就学期間の延長、教育から職業への参入経路と時期の多様化、未婚化などが起こり、「青年期」の具体的な想定期間や開始・終了時期を変化させた。岩上（2010）によれば、日本においても、就職・結婚をもって一区切り（青年期の終了）とする従来の考え方は、1990年代以降、フリーターの増大と未婚化の進展のなかで曖昧になっただけでなく、徐々に実質的な意味をなさなくなってきた。

この20世紀後半において「青年期」と同時期を示す時期について、以下に述べる「成人期への移行」／「成人（への）移行期」という用語が用いられるようになる。

第2項 「成人期への移行」

成人期前のこの時期は、ライフコース論において、学卒、就職、離家、経済的独立、結婚というイベントを経験する時期として定置されていた。従来の、青年期から成人期へと向かう時期に経験すると想定されてきたこれらのイベントの経験の変容と経験期間の相対的長期化、さらには経験時期と経験順序の個人化を受けて、1980年代後半頃から、この時期について「成人期への移行」／「成人（への）移行期」という用語が用いられるようになった。

ジョン・クローセンによれば、成人期への移行を職業生活と結婚生活の開始と捉え、「成人期への移行」とは、移行期間自体を指しているのではなく、「成人期」になること自体を指しているとされる。『ライフコースの社会学』（ジョン・A・クローセン／佐藤、小島訳 2007）において、

人生の基本的な筋書きは、青年がまもなく入っていく2つの世界——結婚生活と職業生活——によって決まる。しかし（他人からいろいろな援助があろうとも）その筋書きは、それを演じる本人が書かなければならない。

と述べられているように、子どもから大人へ移り変わるこの時期が個別化、多様化していると認識されていることが分かる。

ここで、成人期への移行という概念について、「成人期への移行」もしくは「成人（への）移行期」のどちらかが論者の裁量の範囲で用いられていることについて触れておく。どちらもライフコース論における子どもから大人へ移り変わる同じ時期を表している。岩上によれば、どちらかといえば、青年期から成人期へと変わる際に、「移行期」という一定の「パターン」が存在するような印象をもたらす後者よりも、「プロセス」の意味合いがより強い前者の「成人期への移行」の方が、よく使用されているようだ。また、どちらの場合も、移行の目標である「成人期」の概念自体が曖昧になっている今日、この言い方が適当だとは必ずしも言えないという指摘もあるが、本論では多くの先行研究にのっとり前者の「成人期への移行」を用いる。

ジョン・クローセンによれば、従来の典型的な青年期から成人期への移行とは異なる「成人期への移行」は、以下の三つの特徴を有する。

第一に、成人のライフコースモデルは、性別分業を前提としない。したがって、女性も（従来の）男性と同じ出来事経験を前提とする（すなわち、学卒、就職、経済的自立——ただし、離家と結婚についてはすでに男女ともに大きく変容している）。

第二に、結婚というイベントが選択肢となり、必ずしも結婚をもって青年期の終了とはならない。それは男女双方にいえらる。

第三に、「移行」の個人化が進む。ただし、少なくとも「社会での自立した生活」が成人期の目標になるが、この「自立」の態様には階層的バリエーションが存在しうらる。

岩上（2010）は、この特徴について以下のように解釈している。

この特徴を一言でいえば、成人（期）への移行の「脱ジェンダー化」と「個人化」であり、従来男性に期待されていた社会的自立の条件が、後期近代には女性にも同等に期待されるようになったことがわかる。また、移行の個人化が進むということは、個人がおかれた環境条件、とりわけ資源状況に左右されるために、「格差」を如実に反映することにもなる。

青年期から成人期への道筋は、単純な「ステージの転換」ではなく、複線的な「プロセス」として明確に概念化されるようになった。

以上のことから、子どもから大人へと移り変わる時期は、進学の手由や修学期間の個別化、結婚の選択性などの変化から、従来のようにほとんどの子どもが一定の時期に横並びに大人へ変わるといったような単純な時期だと認識されなくなったことがわかる。若者自身を取り巻く環境やライフイベントにおける個人の選択により多様化した移行の様相が、「成人期への移行」として認識されていることがわかる。

第3項 「成人期への移行」を構成する一部としての「ポスト青年期」

「青年期」という従来の概念だけでは若者の発達段階をとらえ切れなくなった20世紀後半において、日本の研究においても新たな時期の概念が指摘されている。「ポスト青年期」とは、発達心理学で扱う「青年期」は過ぎているが、かといって「一人前＝大人」と位置づけられる「成人期」とも同定できない時期のことである（宮本、岩上 1994,2004）。具体的には、学校は卒業しているが経済的に独立しえていない、かつ未婚で、多くは親元で生活しており、親からの経済援助も受けている、といった若者の現象をどう理解するかという議論から認識された時期であり、「成人期への移行」を構成する時期の一部と認識されている。

この「ポスト青年期」について、岩上（2010）は以下のように述べている。

今日、多くの若者が「移行」に苦しんでいるといわれている。だがこの現象が、成人期への移行がシステムとして「困難」になったことによるものなのか、移行の個人化が進んだことによるものなのかを弁別する必要があるだろう。

就職するにあたってより構造的に選別され、結婚することが自明のものでなくなったことは確かである。そうした新しい環境に若者が適応することを求められるようになったの

だとすれば、それは移行プロセスにおける新しい課題の出現であり、これこそが先進社会における成人期への移行の相貌だろう。「ポスト青年期」の登場は新しいライフコース・パターンの位相と考えられる。

以上のことから、「成人期への移行」を構成する一つの時期として「ポスト青年期」があり、若者問題として議論される成人への移行を上手く達成できていない若者は、主にこの時期にあたりとされていることがわかる。また、学卒と同時に就職が決まり生活が安定し、誰もが当然のように結婚するという従来の青年期から成人期への移行が成立しなくなった先進社会において、若者はこの「ポスト青年期」で示される個人ごとの状況や選択へ、個人ごとに適応することが求められており、岩上はこれこそが新たな成人期への移行の形態だと考えている。

第1項から第3項より、若者が成人へ向かう時期とその時期の若者が抱える問題は、修学期間や就職時期、結婚といったライフイベントの個別化・多様化を受けて、従来の「青年期」という一つの時期（発達段階）ではなく、「成人期への移行」という（「ポスト青年期」という時期を含む）複線的な発達過程でとらえられるようになったことがわかった。また、一人前である成人になる時期が遅れる自立不全の問題について、成人期への移行困難と単純に問題視するだけでなく、移行時期や過程が個人化しているという視点から、若者それぞれに個別の状況に適応することが求められているというとらえ方があることもわかった。

大学生は学卒という条件を満たさないことから、岩上と宮本が名づけたポスト青年期には該当しないが、勉学や周囲の人間関係から自己を形成していく点や、就職活動を通じて社会に出て行く準備をするという点では、卒業後の人生への準備期間という側面を持つと考えられる。よって、大学生は成人期への移行のただ中に位置するといえ、その後上手く移行を達成し社会で一人前と認められるか、移行困難としてポスト青年期に位置することになるか、という差異が生まれる時期ではないかと考えられる。

大学生を含む若者はどのようにして、移行困難の要因となる状況に適応しそれぞれに移行を達成すればよいのか、それを検討するために、以下では「成人期への移行」の特徴、つまり移行過程の課題である「自立」とはどういったことなのかについて述べていく。

第3節 「自立」の定義

自立とは、意思決定における自己決定権と、遂行における自己管理能力のことであり（上野 1998）、経済的自立・生活的自立・精神的自立の三要素があるとされる（上野 1998；天

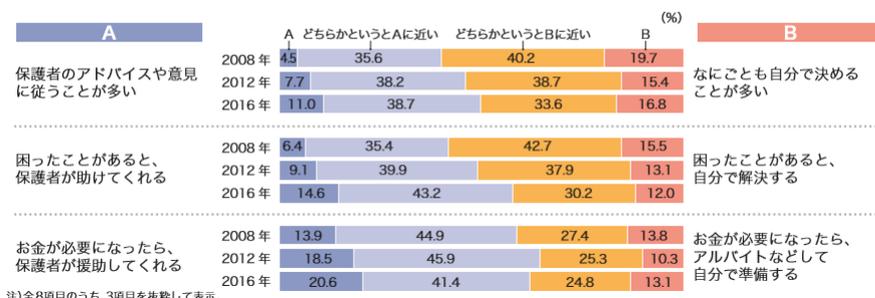
野； 1998；高坂,戸田 2003)。また、量的データから自立の構造をとらえるため行われた尺度化の研究においては、生活身辺自立の側面を含む研究（渡邊 1991b,1992；福島 1992,1996）や、社会的自立の側面を含む研究（大石,松永 2008）がある。渡邊は、これまでの自立の研究が男子中心の視点で行われ、生活身辺的な自立が軽視されてきたことを指摘し、自立獲得には生活身辺的行動の自立も重要であると述べている（渡邊 1992）。同じく男子中心の視点に偏らない自立の研究として、フェミニズム心理学の視点では、男性モデルの自立では動作主性の獲得を重視し、女性の自立では共同性を重視する（Gilligan 1982 岩男監訳 1986）と言われている。さらに、自立研究の中心を担う青年心理学の立場では、「自立とは、自分なりの見通しをもって、人生を切り開いていくこと」と述べられている（白井 2006）。一方で大石,松永は、これまでの自立の研究に、自立問題を親との経済的關係や、雇用状況などの社会経済的要因との関連においてとらえようとする視点が反映されていないことを指摘し、心理的内容に偏らない自立尺度が必要であると述べている（大石,松永 2008）。

「自立をどうとらえるかは社会文化的な背景において異なるため、研究においても、明確な定義がなされないまま使用されている場合も多くみられる」（渡邊 1991a）と述べられているように、上記のことからも自立は研究分野の視点の違いや対象の違い、性差により、その内容の違いが見られることがあるとわかる。望ましい自立がどのようなものであるかはその時々文化や社会により異なるということである。よって、現在人々が理想と思っている「自立」は本論においても理想の「自立」であると認識できると考え、調査においては自立に関し、回答者に対して直接の定義を示さない。本研究での操作的な定義としてはアンケートにおいて「自立している」と答えることをもって、そのまま自立しているとみなすことにしたい。一方で、心理学領域を中心に行われてきた先行研究から、自立が多側面からなる概念であることが実証されており（渡邊 1991,1992；福島 1992,1996；高坂,戸田 2006；大石,松永 2008）、複数の要素を用いることでおおよそとらえることが可能だと考えられる。そこで、従来から述べられている経済的自立・生活的自立・精神的自立の三要素に加え、量的データから研究成果が提示されている生活身辺自立や、2000年代以降着目されるようになった親との関係性を含む社会的自立の要素を用いて、当人の主観とは別の視点からも大学生の自立の現状をとらえていく。

ここで親との関係性や経済的關係についての自立要素を用いるのは、本論が大学生の自立過程に着目しており、大学生の親との心理的癒着傾向を重視しているためである。ベネッセ教育総合研究所の「大学生の学習・生活実態調査報告書 [2016年]」によれば、2008年から2016年までの8年間に、「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」「困ったことがあると保護者が助けてくれる」「お金が必要になったら保護者が援助してくれる」と答えた大学生が増加し、その割合が、自分で決めたり解決したりすると答えた大学生を上回る結果が出ている（図表9）。この結果から、大学生が保護者に期待する役割、また実際に恩恵を受けている役割が大きくなっていることが指摘できる。何事も親頼りという学生が増加

している現状から、本論では「親からの自立」について重点を置きたいと考えた。そこで、以下に自立過程における親子関係のどのような点が問題視されているのか、またどのような関係が望ましいとされているのかについて、先行研究をもとに述べていく。

図2-7 保護者との関係



【図表9】資料出所：ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室「第3回大学生の学習・生活実態調査報告書ダイジェスト版 [2016年]」

第1項 日本の家族規範と親子共依存

本項では「親からの自立」をとらえる上で、日本の伝統的な家族規範（親族システム）や日本人特有の意識が、子の自立意識にどのような影響を与えているか述べていく。

日本の家族は、父親の物理的・機能的不在と、男性は仕事、女性は家庭といった伝統的性別役割観が顕著であると指摘されてきた（柏木 1993）。こうした性別役割分業規範を含んだ家族規範は、一家の家長（妻に対する夫、子に対する父、一家における長子）が家族内のすべてを取り仕切る家制度が一般的であったかつてに比べればあからさまではないものの、近年でも残っていると言われている。山田（2012）によれば、近年女性の社会進出が注目され共働き家庭やキャリアで活躍する女性も増えているが、パートや派遣など不安定な仕事に就く女性がいまだに多く、女性が仕事で自立できず夫に経済的に依存するという状況には変化がないようだ。また、2000年以降の若年女性は専業主婦志向が強いという調査結果もあり、山田と明治安田生活福祉研究所の未婚者調査において、女性が高年収の男性を求める傾向が強いという結果が見られた。つまり、近年の女性にも夫の稼ぎで生活するという意識がいまだに残っており、経済的自立意識が低い女性が多いことがわかる。また、夫と妻の一日の勤務時間の違いによる影響もあるが、子育てや教育の中心を担うのは母親が多いという調査結果もあり、日本では母子間の癒着が強い傾向が見られることも指摘されている（茂木 1997；水本、山根 2010）。実際に、精神的自立尺度を作成するため大学生を対象として行われた調査でも、子が信頼を抱いたり親密性を感じたりする割合は父親より母親の方が高く、特に女子学生では母親を気づかたり母親の価値観にとらわれる傾向が強いという結果が出ている（水本 2018）。

また、下重（2015）によれば、日本人は人に同調し和することが美德だという意識を持

ち、家族について「仲が良く理解し合っている」という理想像を抱いている。「心温まる家族番組」をメディアが発信するなど、世間・社会的にも家族が美化され、家族間で「個と個」というお互いが個人同士であることを意識できない実態があるとし、役割的家族や親子共依存の問題が指摘されている。

以上のことから、伝統的な家族規範の影響が近年にも残っており、日本の若者は特に母子間の共依存や女性の経済的自立意識の低下が起りやすい環境にあるという指摘があるとわかる。したがって、日本の若者の自立をとらえるうえで親との関係や家族背景、親からの自立が重要であり、これらの状況の違いが個人の成人期への移行達成の可否に大きな影響を与えていると予想できる。

第2項 自立過程における望ましい親子関係

親からの自立不全が問題として指摘されていることを見てきたが、本項では自立過程において望ましい親子関係とはどのようなものかについて、先行研究を見ていく。

宮本（2004）は、20代の若者の親子関係は「半依存・半自立」を経て、対等で対恵的關係を特徴とする中期親子関係に達するという発達観・移行観を提示している。20代の若者は「親への依存」から「親からの自立」への転換をし、それまでの親子関係において親が担ってきた役割は小さくなり、親も子も同等に役割を担うようになるということである。また、正岡（1993）によれば、20代の若者と親との関係は、親も子どもともに成熟した大人として、社会的な相互作用を期待される関係、すなわち互いに機能的に自立し、情緒的な交流を深め合うような関係へ変容を遂げると想定されてきた。しかし、実際の様々な調査から、20代の親子関係の実態では、たとえ子が就職していても同伴行動や家事・金銭的援助が変わらず継続し、それらの相互作用を通して、情緒的な親密性が維持されていることが明らかにされている（岩上 2005）。つまり、実際の20代の親子関係は依存から自立へ転換しておらず、子が親へ一方的に依存する状態から親子相互に依存的な関係へ変化していることが分かる。

若者から見て両親という存在と、友人や特に親密な他者（恋人）の存在がどのように位置づけられるかについて、従来の議論では大きく二つのモデルが提唱されている。田中（2010）によれば、それぞれ「切り替えモデル」と「相補的關係モデル」であり、両モデルの相違は、「成人への移行」観と、親と友人の關係のバランスという二点に集約できる。第一の「切り替えモデル」とは、アングロサクソン型の社会の自立観を主なモデルとしており、自立の過程で若者にとっての「重要な他者」が母親から同性の友人を経て異性の友人へと移行し、異性の友人・配偶者（恋人）との關係が強まると想定するものである。つまり、若者は発達過程において、親から友人へ、さらにパートナーへといった重要な他者の切り替えを行うと主張されている。第二の「相補的關係モデル」とは、生涯発達心理学の立場から主張されるモデルであり、誕生時から継続している安定的な教育者との愛着關係は成人子の主觀的狀態

をよい状態に保ち、友人や恋人など親密な他者との対人関係を円滑にし、安定的なパートナーシップの獲得にプラスの効果をもたらすと想定するものである。つまり、発達過程において親子の愛着と友人関係とは競合せず、相補的な関係にあると主張されている。

二つのモデルでは若者にとって望ましい親子関係のあり方が異なり、前者では親と友人が「重要な他者」として競合し、親の影響が小さく限定的になることが望ましいとされる。一方後者では、良好な関係の親と友人はどちらも若者にとって重要かつ相補的關係にあり、親の影響力が一定の状態を持続することが望ましいとされる。また、個人が対人関係から得る心理的安寧を維持・向上させるような存在、またはその存在の行動（具体的には、悩みを聞いてくれる、理解を示してくれるなど）を情緒的サポートとすると、親と友人から得られる情緒的なサポート量とバランスについても両モデルには違いが見られる。田中の解釈によれば、前者では、サポートの量もバランスも親から友人への切り替え、つまり親から受けるサポートの方が多状態から、友人から受けるサポートの方が多状態へ変化することで「成人への移行」を論じている。一方後者では、親と友人いずれについてもサポートの量が多いことに価値をおき、その上でバランス、つまり親が中心の構成から、友人や恋人を含む対人関係をバランスよく保持できるようになることで「成人への移行」を論じている。つまり、発達過程において親や友人とどのように関係をとるもつことが成人として望ましいのか、発達観や主張が異なる二つのモデルがあるということだ。

田中はどちらのモデルの状況が若者にとって「自立」に繋がっているか、東京都府中市と長野県松本市の20代の未婚者を対象とした調査から分析を行っている（田中2001,2002,2010）。まずサポートの量を見ると、男性よりも女性の方がいずれの提供者からもサポートが多く、また男女とも父親よりも母親からより多くのサポートを受け、友人では学校や職場の友人よりもそれ以外の友人からより多くのサポートを受けているという結果だった。個人とサポートの量を見ると、府中では一人暮らし、高学歴、恋人がいる者ほどそうでない人に比べて友人からの情緒的サポートを多く得ており、松本では本人の就労形態、年収、恋人の有無が友人からの情緒的サポート量に差を生むという結果だった。次にサポートの量やバランスと自立意識との関係を見ると、男性では地域にかかわらず、離家経験があり恋人がいる者が自立しているという自覚が高かった。加えて、府中では親と別居し年収が高い者が、松本では友人からのサポートが多い者が、それぞれ自立しているという自己評価がより高い結果だった。女性では、府中においては親と別居、高年収、離家経験がある、友人サポートが多い者が自立の自己評価が高く、松本においては恋人の有無のみが自立の自己評価に影響しているという結果だった。

以上の結果を受けて田中は、女性は対人関係の中で、男性は離家や恋人獲得・キャリアなどの地位達成によって親から精神的自立を評価していることから、男性は「切り替えモデル」、女性は「相補的關係モデル」による自立過程の説明があてはまるとした。すなわち、自立意識と関連する要因は地域やジェンダーによって異なり、年齢や就業形態よりも対人関係の状況が精神的自立に対する自己評価により影響していたと述べられている。

田中の調査は学卒者を対象としていることから、収入やキャリアという地位達成の要素が親からの精神的自立に影響しているという結果を得ているが、就職前の大学生にとって地位達成とはどのような要素であり、それらは自立に影響するのだろうか。また、あてはまる自立モデルが性差により異なるという結果を得ているが、調査対象は単純に男女という要素だけでなく、高収入者の割合が多い男性と高収入者の割合が少ない女性という要素でも分かれている。そのため、低収入を理由に親との情緒的関係を深めざるをえない状況が、調査結果に影響を与えていると考えられる。在学中のため本人の収入に男女差が表れにくいと考えられる大学生では、どちらのモデルがより「自立」に繋がっているのだろうか。さらに、学卒後の若者にとって過去の離家経験が親からの精神的自立に影響しているという結果があるが、この離家経験には在学中の経験が含まれると想定できる。では、大学生の現在の離家経験は自立に影響しているのだろうか。これらについて、本論の調査で見ていきたい。

第4節 第一章のまとめ

本章では、現代の若者が抱える問題と「自立」について述べてきた。

第一節では、未婚化やフリーター問題を代表的な例として、若者の自立不全の問題が社会的関心を集めていることを述べた。これらの問題は若者本人の自立に対する自覚欠如のみが原因ではなく、家族関係・経済状況などの若者が置かれている環境や、修学期間の長期化・結婚の選択制への変化といった社会構造による影響があると認識されていた。

第二節では、若者が自立を迎える時期が単一でなくなり個人化したことを受け、この時期は従来の「青年期」からプロセスの意味合いを強く持つ「成人期への移行」というとらえ方をされるようになり、自立を迎える若者が置かれた環境や、ライフイベントにおける選択の違いにより多様化した移行の様相そのものが、自立過程として認識されるようになったことを述べた。「成人期への移行」の一部期間に位置し、自立不全の若者が属する「ポスト青年期」という概念も登場した。以上より、若者の自立過程や付随する自立不全の問題が多様化したこと、また自立過程や問題のとらえ方も変化し、若者がそれぞれに個別の状況に適応することが求められているとわかった。

第三節では、「自立」とはどういうことを指すのか定義を述べようとした。しかし、様々な先行研究で用いられる「自立」の内容には違いが見られ、望ましい自立がどのようなものであるかはその時々文化や社会により異なるとわかった。よって本論ではあらかじめ「自立」を定義せず、調査から現在人々が理想と思う「自立」がどのようなものか考察することにした。「自立」のとらえ方については先行研究にのっとり、従来から述べられている経済的自立・生活的自立・精神的自立の三要素に加え、生活身辺自立や、親との関係性や経済的関係についての自立要素を用いることにした。また、日本の若者は伝統的な家族規範の名残

りから自立を妨げられる環境にいることが多いという指摘より、「親からの自立」を達成することが、他の要素の自立達成や自立過程のどこに位置するかということに大きく影響するのではないかと考えた。

本章では、大学生の自立についてどのような問題が指摘されているかについても述べてきた。近年の大学生は、経済的援助から何かしらの自分自身に関する決断に至るまで親頼りにする傾向が指摘されており、「親離れできない大学生」として問題視されていた。加えて、大卒でも 8 人に 1 人の割合で正規の職業に就けない、もしくは仕事をしない者がいることから、世間で指摘される若者の自立不全問題が無関係でないことがわかった。大学生は在学中に年齢として成人を迎えるが、学卒という条件を満たさないことから「成人期への移行」過程において「ポスト青年期」より前に位置すると言える。その後上手く移行を達成し社会で一人前と認められるか、移行困難としてポスト青年期に位置することになるか、という差異が生まれる時期ではないかと考えられるため、大学生の自立過程や自立している者とそうでない者の違いをとらえることは重要であると考えた。学卒者の若者を対象とした先行研究より、在学中の離家経験や対人関係における「親」の位置付けが大学生の自立にも影響していそうだとはいえ、これらの視点から立てた仮説を示しつつ大学生の自立過程について調査することとした。

第 2 章 アンケート調査の分析

本章では、宇都宮大学の学生や卒業生に実施したアンケート調査の結果を SPSS を用いて分析し、現在の大学生の自立過程がどのようなものであるか、また自立している者とそうでない者との差は何を要因として生じているのか、等について述べていく。

第1節 調査方法

本節では、分析を行う前にアンケート調査の概要について述べていく。

アンケートの目的は、大学生の自立過程を検討するにあたり、現在の大学生が想定する望ましい自立のあり方を明らかにし、親との関係や家庭の経済環境といった家族背景、所有する人間関係の違いなどが、自立の度合いに影響するかについて分析することである。

調査対象者は、1年生50名、2年生48名、3年生24名、4年生31名、学年不明8名、計161名の在學生と、17名の卒業生である。(在學生の学部内訳は、教育学部100名、国際学部9名、農学部3名、工学部7名、地域デザイン科学部38名、学部不明8名)本論で重きを置くのは現在の大学生の自立に関する実態であるため、以下の分析は原則在學生の回答結果のみを用い、卒業生の回答結果については自由記述欄の項目を在學生と比較するために扱う。

調査時期は、2018年12月から2019年1月である。

アンケート(質問紙)の調査内容は、実際に用いた調査用紙を本論文の最後に記載する。

第2節 アンケートの分析

第1章第3節において、本論では自立について複数の要素からとらえると述べた。具体的には、複数の先行研究を参考に大石が作成した自立尺度の項目を、精神的自立・生活的自立・経済的自立・生活身辺处理的自立の要素の中でそれぞれ下位区分し、縮小して使用した。(質問紙A-1(ア)~(セ)の項目)ただし、大学生が回答しやすいように項目の一部をより具体的な文章に変更したことから、すべての項目を自立尺度として使用できるか検討するために、それぞれの要素ごとに因子分析や信頼性分析を行った。

以下、精神的自立、生活的自立、経済的自立、生活身辺的自立の順番で分析結果を示している。

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.576	5

項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のア ルファ
自立・自分の考え	7.6522	3.166	.263	.559
自立・関係維持	7.0248	2.699	.322	.527
自立・相手を考える	7.1056	2.583	.381	.494
自立・責任を考える	7.0000	2.288	.419	.467
自立・自決できる	6.5963	2.430	.311	.541

表 2-1

表 2-1 の信頼性分析より、Cronbach のアルファが最も高い数値となるよう、「(ア)人には人の、自分には自分の考えや意見がある」「(イ)周囲の様々な人とよい関係を維持している」「(エ)相手の気持ちを考えながら発言、行動している」「(オ)自分の行動にともなう責任を考えながら行動している」「(ク)自分の意見や行動が人と違っても、自分で決めて貫いている」の五つの項目すべてを精神的自立の尺度とした。

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.477	3

項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合計 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
自立・収支把握	-5.0000	2.188	.230	.486
(逆転) 規則的でない	-.6211	1.799	.325	.328
(逆転) 蓄えない	-.2422	1.860	.341	.301

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.486	2

項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合計 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
(逆転) 規則的でない	-2.6894	.790	.321	.
(逆転) 蓄えない	-2.3106	.865	.321	.

表 2-2

表 2-2 の信頼性分析より同様に、「(キ)自分で使うお金の収支を把握している」を除外し、「(ウ)将来に備えた蓄え（貯金、生活に役立つ勉強など）をしていない」「(カ)規則正しい生活をしていない」の二つの項目を生活的自立の尺度とした。

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.442	3

項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合計 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
自立・自収入で購入	-.6522	2.566	.357	.204
自立・返済約束	-1.1988	2.623	.178	.521
(逆転) バイトしない	5.1553	2.469	.290	.307

信頼性統計量

Cronbach のアルファ	項目の数
.521	2

項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合計 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
自立・自収入で購入	-3.5031	1.077	.354	.
(逆転) バイトしない	2.3043	.863	.354	.

表 2-3

表 2-3 の信頼性分析より同様に、「(セ)親から経済的援助を受ける (受けている) 場合、返済する約束のもと援助を受ける (受けている)」を除外し、「(シ)アルバイトをしていない」「(ス)欲しいものは自分で働いて得た収入のみで買っている」の二つの項目を経済的自立の尺度とした。

信頼性統計量

Cronbach のアルファ	項目の数
.628	3

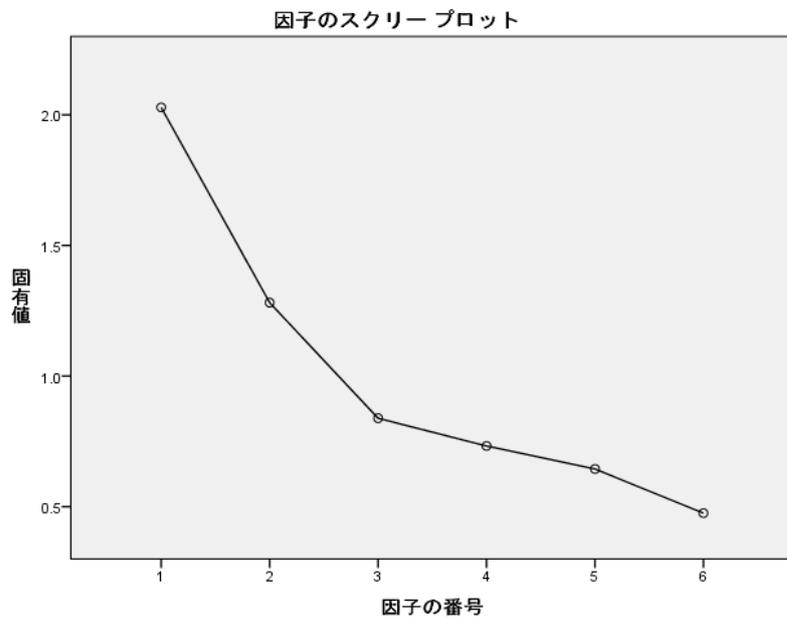
項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合計 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
自立・自炊	.0745	3.732	.475	.507
自立・掃除	.7267	3.662	.413	.566
(逆転)洗濯人任せ	5.7950	2.289	.482	.507

表 2-4

表 2-4 の信頼性分析より同様に、「(ケ)日頃の自分の食事は、栄養バランスを考えたいうえで自分で作っている」「(コ)自分で部屋の掃除を定期的に行っている」「(サ)自分の洗濯物も、家族や同居人に洗濯してもらっている」の三つの項目すべてを生活身辺処理的自立の尺度とした。

また、特に精神的自立をはかるうえで社会的のぞましさを意識した回答結果を避けるため、広義に解釈できる大石の尺度に加えて、より具体的な項目を含む共依存尺度の使用を検討した。共依存とは、「他人に頼られていないと不安になる人と人に頼ることでその人をコントロールしようとする嗜癖的な人間関係」(斎藤 2003) や、「人に必要とされる必要のある人」(安田 2001) などと定義されている。「共依存には様々な要因があり、正確に定義をすることが非常に困難な概念であるが、対人関係の問題などに影響を及ぼしているという現状については異論のないところであると思われる」(前田,長友,田中,三浦 2007) と述べられており、共依存は少なくとも対人関係における心理的問題には影響しているものである。大石の研究をはじめ、自立に関する多くの先行研究では、精神的自立が対人関係における心理的自立の側面を含むと述べられている。よって、共依存を精神的自立に関連する要素ととらえ使用を検討した。共依存の尺度は、西尾(2000)が提唱した共依存症者の 22 の行動パターンを基に前田たち(2007)が作成した尺度から、病理性の高い項目を除外したものを使用し(質問紙 A-1(ソ)~(ト))、さらに本調査の分析に用いる前に因子分析と信頼性分析を行った。



パターン行列

	因子	
	1	2
依存・相手合わせ	.651	
依存・考えすぎる	.622	-.318
依存・断れない	.616	.179
依存・問題関係	.489	.213
依存・一人不安		.518
依存・失敗繰り返し	.108	.337

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 3 回の反復で回転が収束しました。

表 2-5

表 2-5 の因子分析の結果、二つの因子が抽出された。項目を因子ごとに分けて尺度とするべきか、どちらかの因子のみを尺度とするべきか判断するため、さらに信頼性分析を行った。

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.504	6

項目合計統計量

	項目が削除され た場合の尺度の 平均値	項目が削除され た場合の尺度の 分散	修正済み項目合 計相関	項目が削除され た場合の Cronbach のア ルファ
依存・一人不安	11.1063	5.265	.070	.571
依存・失敗繰り返し	10.7313	5.305	.144	.514
依存・相手合わせ	11.7563	5.053	.420	.404
依存・考えすぎる	11.6938	5.006	.217	.479
依存・断れない	11.5188	4.641	.420	.380
依存・問題関係	11.1000	4.254	.401	.373

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.651	4

項目合計統計量

	項目が削除され た場合の尺度の 平均値	項目が削除され た場合の尺度の 分散	修正済み項目合 計相関	項目が削除され た場合の Cronbach のア ルファ
依存・相手合わせ	6.4313	3.077	.494	.564
依存・考えすぎる	6.3688	2.612	.427	.588
依存・断れない	6.1938	2.761	.466	.560
依存・問題関係	5.7750	2.553	.387	.626

表 2-6

表 2-6 の信頼性分析の結果、Cronbach のアルファが最も高い数値となるよう、因子分析で抽出された因子 2 に属する項目でもある「(ソ)自分一人でやっていけるという自信がない」「(タ)過去の人間関係から学ぶことが少なく、同じことを繰り返すことが多い」を除外した。よって因子 1 の「(チ)相手を喜ばせようとして相手に合わせることもある」「(ツ)相手の

気持ちを敏感に察知して、先のことを考えすぎてしまうことがある」「(テ)「ノー」と言えず、頼みごとをつい引き受けてしまうことがある」「(ト)問題を感じる相手や人間関係に巻き込まれることがある」の四つの項目を共依存の尺度として用いることとした。

それぞれの項目は四段階評価で回答を得ており、得点化して平均値より高かった者を自立度が高い（共依存度が高い）とし、低かったものを自立度が低い（共依存度が低い）とした。

大石と同様に要素ごとの自立度をひとまとめにし、さらに共依存の尺度を加えて「自立尺度」として使用できるか検討するために、すべての項目について信頼性分析を行った。

信頼性統計量

Cronbach のアルファ	項目の数
.601	16

項目合計統計量

	項目が削除された場合の尺度の 平均値	項目が削除された場合の尺度の 分散	修正済み項目合計 計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
自立・自分の考え	12.9938	25.377	.117	.599
自立・関係維持	12.3750	24.651	.176	.593
自立・相手を考える	12.4500	23.658	.335	.574
自立・責任を考える	12.3438	22.881	.383	.564
自立・自決できる	11.9313	23.825	.222	.586
(逆転) 規則的でない	16.4813	23.421	.196	.591
(逆転) 蓄えない	16.8813	22.910	.277	.577
自立・自収入で購入	11.8750	22.752	.271	.578
(逆転) バイトしない	17.6813	22.671	.229	.586
自立・自炊	10.9625	22.477	.332	.567
自立・掃除	11.6063	22.089	.329	.566
(逆転) 洗濯人任せ	16.6688	23.229	.072	.633
依存・相手合わせ	12.3563	24.369	.238	.587
依存・考えすぎる	12.2938	22.963	.310	.572
依存・断れない	12.1188	23.690	.262	.581
依存・問題関係	11.7000	24.714	.064	.612

信頼性統計量

Cronbach のアル ファ	項目の数
.619	11

項目合計統計量

	項目が削除され た場合の尺度の 平均値	項目が削除され た場合の尺度の 分散	修正済み項目合 計相関	項目が削除され た場合の Cronbach のア ルファ
自立・自分の考え	7.2484	16.025	.164	.616
自立・関係維持	6.6211	15.024	.282	.598
自立・相手を考える	6.7019	15.048	.273	.599
自立・責任を考える	6.5963	14.092	.392	.576
自立・自決できる	6.1925	14.381	.315	.590
(逆転) 規則的でない	10.7516	13.788	.301	.592
(逆転) 蓄えない	11.1304	13.827	.320	.587
自立・自収入で購入	6.1366	13.881	.288	.595
(逆転) バイトしない	11.9441	13.303	.311	.590
自立・自炊	5.2174	14.634	.197	.615
自立・掃除	5.8696	13.927	.260	.602

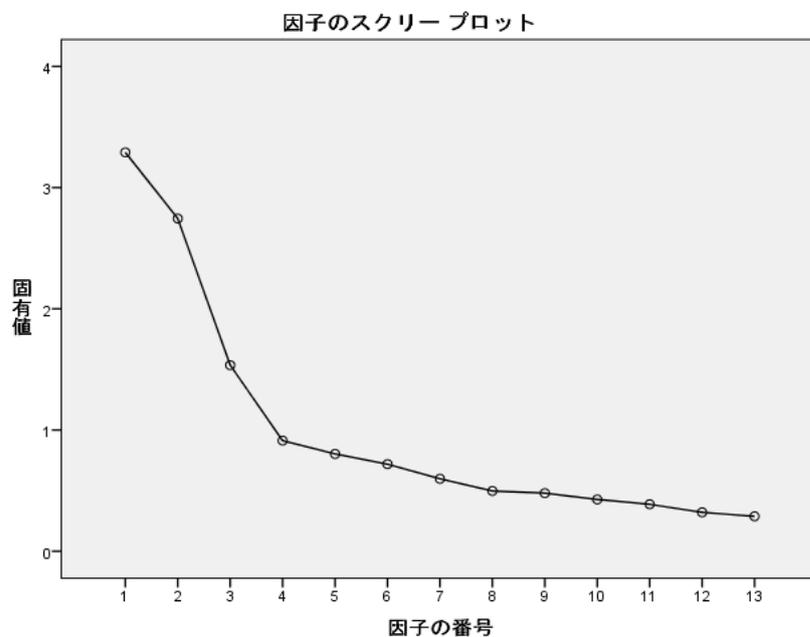
表 2-7

表 2-7 の分析結果より、Cronbach のアルファが最も高い数値となるよう、共依存尺度の項目と生活身動的自立の「(サ)自分の洗濯物も、家族や同居人に洗濯してもらっている」を除外し、総合的な自立の尺度とした。共依存は精神的自立に関連する要素であるが、他の自立の要素とは性格が異なるとわかったため、共依存尺度は総合的な自立の尺度には含まれない独自の要素として扱うこととした。

第 1 項 「親からの自立」 から見た自立

分析結果を述べる前に、親からの自立をどのような尺度を用いてとらえたか示しておく。まず、質問紙 C-1)「(ス)自分が親から精神的に自立していると思う」という項目の回答より、「主観的な親からの自立度」をとらえることにした。次に、子の自立について、親子関係を信頼関係と親密性という二つの視点から見ることで検討した水本 (2018) の尺度を、

信頼関係と親密性それぞれの要素の中で下位区分し、縮小して使用した(質問紙 C-1(ア)~(ス))。本調査の分析において、これらの項目を親からの自立尺度としてひとまとめにして使用できるか検討するために、因子分析を行った。



パターン行列

	因子		
	1	2	3
親自立・関係良好	.859	-.134	-.163
親自立・親しみ合う	.773		
親自立・支持	.725		
親自立・信頼	.688		.109
親自立・後ろめたさ		.759	
親自立・評価気になる		.750	.162
親自立・賛同求める		.599	
親自立・独自行動	.136	-.465	.235
親自立・自決心できない	.166	.452	-.299
親自立・精神的自立		-.204	.573
親自立・気遣う	.157	.179	.554
親自立・理解し行動	.456		.494
親自立・独立考え	-.261	-.106	.355

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 6 回の反復で回転が収束しました。

表 2-1-1

表 2-1-1 の分析結果より、三つの因子が抽出された。水本の研究を参考に、親との信頼関係の項目を多く含む因子 1 を「親との信頼関係」の因子とし、精神的自立を妨げるとされる親の価値観へのとらわれの項目を多く含む因子 2 を「親への依存」の因子として使用することにした。

因子 1 : 「(ア)親は私を信頼してくれている」「(イ)親の生き方を支持している」「(オ)親と私は、他人に対してよりもお互いに対して親しみを感じている」「(カ)親の立場や気持ちを理解して親に接している」「(シ)自分と親との関係は良好だと思う」の五項目。

因子 2 : 「(ク)自分の意見や行動に親が賛成していないとき、不安を感じる」「(ケ)親からどう評価されるか気になる」「(コ)親のアドバイスに従わないと後ろめたい気がする」「(サ)親に相談せずには、自分で決心できないことがある」、逆転項目として「(エ)親の考えや期待にとらわれることなく行動している」の五項目。

それぞれの項目は四段階評価で回答を得ており、得点化して平均値より高かった者を信頼や依存の度合いが高いとし、低かったものを信頼や依存の度合いが低いとした。

本節では、以上の尺度や因子を使用して分析を行っていく。

まず、主観的に親から自立しているかということが、総合的な自立の度合いに影響するか見ていく。表 2-1-2 より、主観的に親から自立している人ほど、総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、大学生の自立過程において親からの自立を達成しているかは重要であり、自分が親から精神的に自立していると思える人は、他の側面でも自立達成に近い位置にいる傾向があるとわかった。

主観的に親から自立する要因としては、親子関係や家庭環境といった家族背景と、学生当人の人間関係における親の位置づけや、人との付き合い方の性質が関係すると考えられる。親子関係のとらえ方としては、親と対等に近い信頼関係を築いているのか、あるいは親の価値観や言動にとらわれてしまう依存関係であるのかといった心理的な関係と、親とどのくらい一緒に過ごしているかなどのコミュニケーション関係があると考えられる。

第一に、親子関係の影響を見る。まず親子の心理的な関係を見ると、表 2-1-3 より、親への依存度合いが低い人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、親の評価を気にしていたり親の考えや期待に沿った行動をしたりしがちな人ほど、親からの精神的な自立度合いが低くなる傾向にあり、また本人はそのことを自覚しているとわかった。一方、自分が親から信頼されていると思っていたり親を気遣いながら接していたりするか、といった信頼関係の度合いは、主観的な親からの自立の度合いには影響していなかった。したがって、親との関係性には信頼関係と依存関係という異なる性格

の関係性があるが、親からの自立に強く影響を及ぼすのは依存関係であり、学生本人が親から自立していると思うためには親子間で強い信頼関係をもてばよいのではなく、どれだけ依存関係の度合いを低くするかが意味を持つということもわかった。

次に、コミュニケーション関係を見ると、表 2-1-4 より、母親とのコミュニケーション頻度が低い人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向があるとわかった。調査においては、共に食事をする、通話を含む会話のやり取りをする、LINE やメール等のやり取りをする、一緒に買い物をする、一緒に趣味活動を行う、の五つの項目を父親と母親についてそれぞれどのくらいの頻度で行うか尋ねることで、親とのコミュニケーション頻度をはかった（質問紙 C-2 (ア)~(オ)）。それぞれの項目について四段階評価から得た回答を得点として合計し、平均より高い得点の者をコミュニケーション頻度が高いとしている。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、母親と頻繁にやり取りをしたり行動を共にしたりする人ほど、親からの自立度が低くなる傾向があるとわかった。一方、父親とのコミュニケーション頻度は主観的な親からの自立度に影響していなかった。たとえば、かなり頻繁に母親のみと行動を共にする学生と、かなり頻繁に父親のみと行動を共にする学生とを比べると、前者は親からの自立度が低い傾向にあるが後者はそうとは限らず、親からの自立度が低い傾向の者と高い傾向の者どちらも存在するということだ。父親と母親とでは同じやり取りでも付き合いの深さが異なり、父親に比べて母親の方がコミュニケーション頻度と心理的距離の近さが強く結びついていると考えられる。したがって、母親とのコミュニケーション頻度が高い者は、その頻度に応じて母親との心理的距離も近くなり、主観的な親からの自立度が低くなる傾向にあると考えられる。

家族関係においては、親への依存の度合いと母親とのコミュニケーション頻度が、主観的な親からの自立の要因となっていることがわかった。表 2-1-5 より、親への依存度が低い人ほど、総合的な自立度が高くなる傾向があるとわかり、表 2-1-6 より母親とのコミュニケーション頻度が低い人ほど、親への依存度が低い傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。つまり、親への依存度も母親とのコミュニケーション頻度も、それぞれ総合的な自立に直接的に影響を及ぼすだけでなく、親からの自立度も含め相互に関係し合う要因だといえる。また、母親とのコミュニケーション頻度と親への依存度合いがどのように影響し合い総合的な自立度の違いを生むのかを見るため、これら三つの要素のクロス表を作成した。表 2-1-7 より、母親とのコミュニケーション頻度が高い人の中では、親への依存度による総合的な自立度の差がそれほどないが、コミュニケーション頻度が低い人の中では、親への依存度が低い人ほど自立度が高い傾向にあるとわかった。クロス表を見ると、コミュニケーション頻度が低い人についてはカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は

有意といえる。よって、親への依存度が低いほど総合的な自立度が高くなる傾向は、母親とのコミュニケーション頻度が高い人には必ずしも当てはまらないということがわかった。以上より、家族関係においては、主観的な親からの自立の要因として「親への依存度合い」と「母親とのコミュニケーション頻度」の二つがあり、特に後者の影響力が大きいと考えられる。また、これらは総合的な自立の直接的な要因でもあることがわかった。さらに、親への依存度が低いことは誰にとっても自立のために必ず必要な要素というわけではなく、母親とのコミュニケーション頻度が高いほど重要性が高まる要素だとも言える。

主観的な親からの自立度 と 総合的な自立度合い のクロス表

		総合的な自立度合い		合計
		高い	低い	
高い	度数	71	35	106
	主観・親からの自立度の %	67.0%	33.0%	100.0%
低い	度数	13	39	52
	主観・親からの自立度の %	25.0%	75.0%	100.0%
合計	度数	84	74	158
	主観・親から自立度の %	53.2%	46.8%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.000 、近似有意確率：.000

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-2

親への依存度合い と 主観的な親からの自立度 のクロス表

		主観・親から自立度		合計
		高い	低い	
高い	度数	39	31	70
	親への依存度合いの %	55.7%	44.3%	100.0%
低い	度数	67	20	87
	親への依存度合いの %	77.0%	23.0%	100.0%
合計	度数	106	51	157
	親への依存度合いの %	67.5%	32.5%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.004 、近似有意確率：.004

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-3

母親とのコミュニケーション頻度の度合い と 主観的な親からの自立度 のクロス表

		主観・親から自立度		合計
		高い	低い	
母・コミュ頻度の度合い	高い	度数 41	33	74
	母・コミュ頻度の度合いの %	55.4%	44.6%	100.0%
母・コミュ頻度の度合い	低い	度数 64	17	81
	母・コミュ頻度の度合いの %	79.0%	21.0%	100.0%
合計	度数	105	50	155
	母・コミュ頻度の度合いの %	67.7%	32.3%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.001、近似有意確率：.001

相関係数は1%水準で有意である

表 2-1-4

親への依存度合いと総合的な自立度合いのクロス表

		総合的な自立度合い		合計
		高い	低い	
親への依存度合い	高い	度数 27	43	70
	親への依存度合いの %	38.6%	61.4%	100.0%
親への依存度合い	低い	度数 56	31	87
	親への依存度合いの %	64.4%	35.6%	100.0%
合計	度数	83	74	157
	親への依存度合いの %	52.9%	47.1%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.001、近似有意確率：.001

相関係数は1%水準で有意である

表 2-1-5

母親とのコミュニケーション頻度の度合いと親への依存度合いのクロス表

		親への依存度合い		合計
		高い	低い	
母・コミュ頻度の度合い	高い	度数 39 52.7%	35 47.3%	74 100.0%
	低い	度数 30 37.5%	50 62.5%	80 100.0%
合計		度数 69 44.8%	85 55.2%	154 100.0%

※正確有意確率（片側）：.041、近似有意確率：.055

相関係数は5%水準で有意である

表 2-1-6

親への依存度合い と 総合的な自立度合い と 母親とのコミュニケーション頻度の度合い のクロス表

母・コミュ頻度の度合い			総合的な自立度合い		合計	
			高い	低い		
高い	親への依存度合い	度数	18	21	39	
		親への依存度合いの%	46.2%	53.8%	100.0%	
		度数	19	16	35	
	合計	低い	親への依存度合いの%	54.3%	45.7%	100.0%
		度数	37	37	74	
		親への依存度合いの%	50.0%	50.0%	100.0%	
低い	親への依存度合い	度数	9	21	30	
		親への依存度合いの%	30.0%	70.0%	100.0%	
		度数	36	14	50	
	合計	低い	親への依存度合いの%	72.0%	28.0%	100.0%
		度数	45	35	80	
		親への依存度合いの%	56.3%	43.8%	100.0%	
合計	親への依存度合い	度数	27	42	69	
		親への依存度合いの%	39.1%	60.9%	100.0%	
		度数	55	30	85	
	合計	低い	親への依存度合いの%	64.7%	35.3%	100.0%
		度数	82	72	154	
		親への依存度合いの%	53.2%	46.8%	100.0%	

※母親とのコミュニケーション頻度が低い者について

正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である（コミュニケーション頻度が高い者については有意でない）

表 2-1-7

第二に、家庭環境の影響を見る。調査においては、親の子に対する経済的援助姿勢、家事などのサービス提供姿勢、親の暮らし向きの経済的余裕、親からの干渉度合い、親の学歴、の五つの項目の影響を見た（質問紙 C-2(カ)~(サ)）。経済的援助姿勢とサービス提供姿勢については四段階の選択肢を用意し、多くの援助やサービス提供をするほど基準が緩い姿勢、援助やサービス提供をしないほど基準が厳しい姿勢とした。親からの干渉度合いについては、金銭面、生活時間、交友関係、の三項目に対し親がどれだけ干渉してくるかという主観を尋ねた。それぞれの項目について四段階評価から得た回答を得点として合計し、平均より高い得点の者を親からの干渉度が高いとしている。

まず親からの援助の影響を見ると、表 2-1-8 より、親の経済的援助姿勢が厳しい人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向があるとわかった。また、表 2-1-9 より、親のサービス提供姿勢が厳しい人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。ここで、主観的な親からの自立の要因となる経済的援助とサービス提供の姿勢が、家庭の経済状況（暮らしの環境）によるものなのか、親の子育てや子どもの自立などに対する価値観によるものなのか判断するため、親の暮らし向きの影響を見た。クロス表を作成したところ、親が経済的に余裕のある暮らし向きであるかどうかは、親の援助姿勢とも主観的な親からの自立度にも関係していなかった。つまり、学生本人から見て余裕がない暮らし向きの親が緩い基準で援助をしている場合もあれば、余裕がある暮らし向きの親が厳しい基準で援助をしている場合もあるということだ。よって、親の基準が厳しく経済的援助やサービス提供を受けていない人ほど、より自分が親から自立していると思っている傾向があるとわかった。また、親の援助の基準は、家庭の経済状況というよりは親の価値観や判断により決められていると考えられる。

次に、親からの干渉度の影響を見ると、表 2-1-10 より、親からの干渉度が低い人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。これは、自分の行動に対して親から口を出されることが多いほど、自分がいまだ親の庇護下もしくは管理下にあると感じやすいため、主観的な親からの自立度に影響するのではないかと考えられる。

次に、両親の学歴の影響を見ると、父親・母親の学歴はどちらも親からの自立度に直接的には影響していなかった。ただし、表 2-1-11 より、父親が大卒や短大卒の人は親への依存度が高く、父親が高卒の人は親への依存度が低い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。高卒の親は、現在の大学生の年齢だった頃には既に社会に出て働いていた人が多いため、子どもが在学中かどうかよりも年齢などから、親の庇護下を離れて一人前になる時期がきていると判断し、ひとりの大人同士のように接する傾向があるのではないかと考えられる。一方で大卒や短大卒の親は、現在の大学生の年齢だった頃は同じく学生であったことから、高卒の親と比べると子どもに対し甘えを許しやすかったり、子どもに寄り添うような接し方をしたりする傾向にあるのではないかと考えられる。よって、父親の学歴に基づく経験や価値観が家庭における子どもとの接し方に影響し、親への依存度を通して間接的に親からの自立度に影響すると考えられる。

以上より、家庭環境においては、主観的な親からの自立の要因として、親の価値観や判断から決められている「親の経済的援助姿勢」と「親のサービス提供姿勢」、「親からの干渉度

合い)、親への依存度を通して間接的に影響すると考えられる「父親の学歴」の四つがあるとわかった。

経済援助姿勢 と 主観的な親からの自立度 のクロス表

		主観・親から自立度		合計	
		高い	低い		
経済援助	緩い	度数	69	47	116
		経済援助 の %	59.5%	40.5%	100.0%
	厳しい	度数	36	3	39
		経済援助 の %	92.3%	7.7%	100.0%
合計		度数	105	50	155
		経済援助 の %	67.7%	32.3%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.000 、近似有意確率：.000

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-8

サービス提供姿勢 と 主観的な親からの自立度 のクロス表

		主観・親から自立度		合計	
		高い	低い		
サービス提供	緩い	度数	81	48	129
		サービス提供 の %	62.8%	37.2%	100.0%
	厳しい	度数	21	1	22
		サービス提供 の %	95.5%	4.5%	100.0%
合計		度数	102	49	151
		サービス提供 の %	67.5%	32.5%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.001 、近似有意確率：.000

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-9

親の干渉度合い と 主観的な親からの自立度 のクロス表

		主観・親から自立度		合計	
		高い	低い		
親の干渉度合い	高い	度数	32	28	60
		親の干渉度合いの%	53.3%	46.7%	100.0%
	低い	度数	70	21	91
		親の干渉度合いの%	76.9%	23.1%	100.0%
合計		度数	102	49	151
		親の干渉度合いの%	67.5%	32.5%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.002、近似有意確率：.003

相関係数は1%水準で有意である

表 2-1-10

父親の学歴と親への依存度合いのクロス表

		親への依存度合い		合計
		高い	低い	
大学	度数	38	28	66
	学歴・父の%	57.6%	42.4%	100.0%
短大・高専・専門	度数	4	9	13
	学歴・父の%	30.8%	69.2%	100.0%
学歴・父 高校	度数	17	39	56
	学歴・父の%	30.4%	69.6%	100.0%
中学校	度数	3	1	4
	学歴・父の%	75.0%	25.0%	100.0%
わから ない	度数	5	6	11
	学歴・父の%	45.5%	54.5%	100.0%
合計	度数	67	83	150
	学歴・父の%	44.7%	55.3%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.021、近似有意確率：.032

相関係数は5%水準で有意である

表 2-1-11

第三に、学生本人の人間関係の影響を見る。調査においては、気を許せるような関係の人

がいるかどうか、またその人にどれだけ気を許せるかというような、質的な人間関係を見るために、情緒的な人間関係の有無についての項目を用いた（質問紙 B ①～⑥）。内容の詳細は、本節第 2 項にて述べるため本項では割愛する。表 2-1-12 より、情緒的サポートに占める友人の割合が大きい人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 10%水準を下回っているため、この結果は有意傾向といえる。ここから、情緒的側面からとらえた人間関係において親よりも友人を高く位置付けている人、つまり親よりも友人の方が気を許しやすいと思っている人ほど、より自分が親から自立していると思っている傾向があると考えられる。また、人間関係を広げる場所を多く有しているか見るために、アルバイトをしているかの影響を見る。調査においては、「アルバイトをしていない」（質問紙 A-1(シ)）という逆転項目について四段階評価から回答を得ており、あてはまらないと答えた者を「アルバイトをしている」、あてはまると答えた者を「アルバイトをしていない」とした。表 2-1-13 と表 2-1-14 より、アルバイトをしている人ほど、より主観的な親からの自立度が高くなる傾向と、より総合的な自立度が高くなる傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。しかし、アルバイトをしていることと友人における情緒サポートの得点とは関係がないことから、アルバイトをすれば気を許せる友人が増えるのかということは傾向としては見られない。よって、アルバイトをしていることは、主観的な親からの自立度と総合的な自立度のどちらに対しても直接的影響を及ぼすことはわかったが、それは気を許せる友人が増えて人間関係の中で重視する相手について、親よりも友人の位置づけが高くなることによるのか、働くことで社会に出る疑似体験をすることによるのか、自分の稼ぎを得ることで経済的に親に完全に頼らず済むようになることによるのか、等の理由は本調査からはわからなかった。

次に、人との付き合い方の性質として共依存度合いの影響を見る。クロス表を作成したが、共依存度合いそのものは親からの自立度にも総合的な自立度にも直接関係していなかった。ただし、表 2-1-15 より、共依存度が高い人ほど親への依存度が高いことがわかった。クロス表を見ると、カイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。親の評価を気にしていたり親の助言に頼るまたは従ったりしているから、周囲の人との付き合いの中でも相手に合わせたり何事も断れなかったりする共依存の性質が強まっているのか、反対に共依存の性質が強まったことで親の評価や助言にとられる依存の度合いが強まったのか、どちらから影響を受けているのか本調査では明確にできないが、親への依存と対人関係の中の共依存は互いに影響し合っていることがわかった。

以上より、学生本人の人間関係においては、主観的な親からの自立の要因として、気を許せる相手として人間関係の中で親よりも友人を高く位置付ける「情緒的サポートに占める

友人割合の大きさ」があるとわかった。人間関係と関連し合っているかは明らかにできなかったものの、「アルバイトをしている」も要因であることがわかった。また、人との付き合い方の性質においては、親への依存を通して影響する「共依存度合い」が間接的な要因であるとわかった。

情緒サポートにおける友人割合 と 主観的な親からの自立度 のクロス表

		主観・親から自立度		合計
		高い	低い	
情緒サポートの友人割合	高い	度数 47 割合・情緒サポートの友人 の % 74.6%	16 25.4%	63 100.0%
	低い	度数 57 割合・情緒サポートの友人 の % 61.3%	36 38.7%	93 100.0%
合計		度数 104 割合・情緒サポートの友人 の % 66.7%	52 33.3%	156 100.0%

※正確有意確率（片側）：.059 、近似有意確率：.075

相関係数は 10%水準で有意傾向である

表 2-1-12

バイトしているか と 主観的な親からの自立度 のクロス表

	主観・親から自立度	合計

		高い	低い	
バイトしている	している 度数	94	38	132
	る バイトしている の %	71.2%	28.8%	100.0%
バイトしていない	している 度数	12	14	26
	ない バイトしている の %	46.2%	53.8%	100.0%
合計	度数	106	52	158
	バイトしている の %	67.1%	32.9%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.014 、近似有意確率：.025

相関係数は 5%水準で有意である

表 2-1-13

バイトしているかと 総合的な自立度合い のクロス表

		総合的な自立度合い		合計
		高い	低い	
バイトしている	している 度数	83	52	135
	る バイトしている の %	61.5%	38.5%	100.0%
バイトしていない	している 度数	2	24	26
	ない バイトしている の %	7.7%	92.3%	100.0%
合計	度数	85	76	161
	バイトしている の %	52.8%	47.2%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.000 、近似有意確率：.000

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-14

親への依存度合い と 共依存の度合い のクロス表

		共依存の度合い	合計

			高い	低い	
親への依存度合い	高い	度数	41	29	70
		親への依存度合いの%	58.6%	41.4%	100.0%
	低い	度数	37	50	87
		親への依存度合いの%	42.5%	57.5%	100.0%
合計		度数	78	79	157
		親への依存度合いの%	49.7%	50.3%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.033、近似有意確率：.043

相関係数は5%水準で有意である

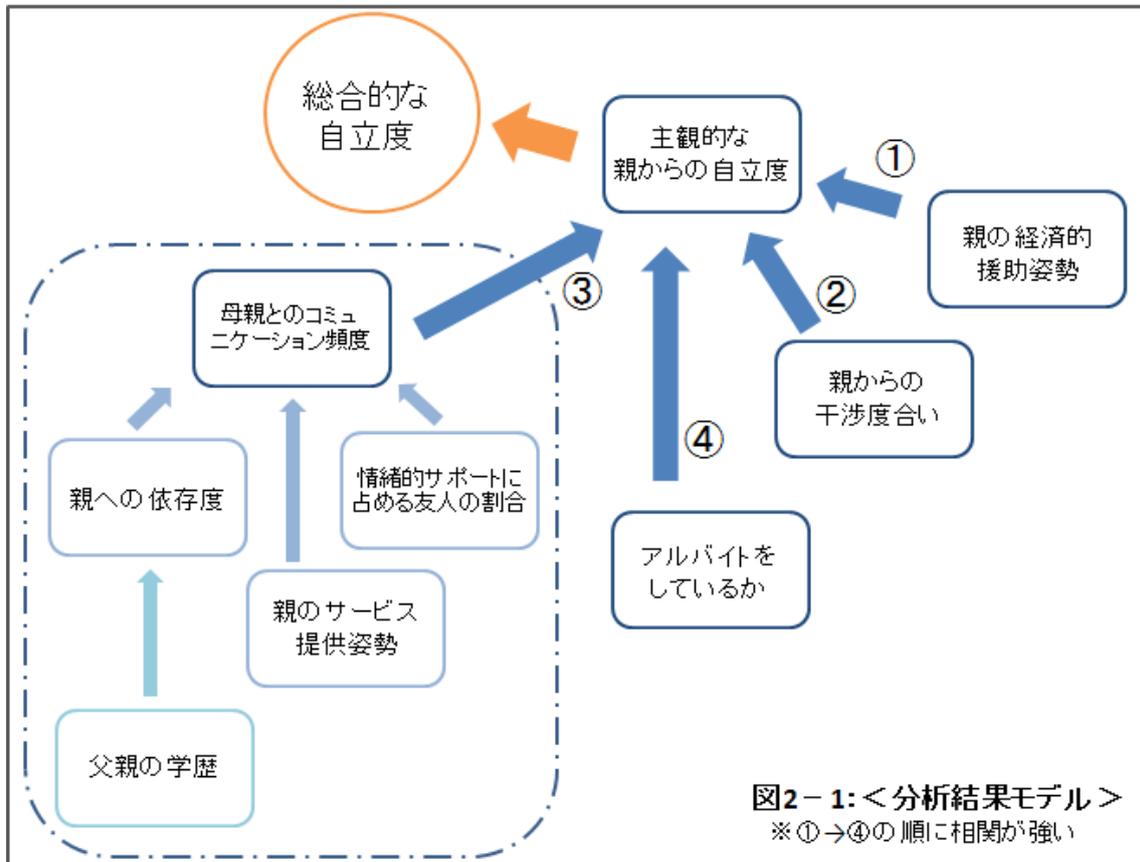
表 2-1-15

さて、本項では「親からの自立」の視点から「自立（総合的な自立）」について分析を行った。主観的な親からの自立度が高い人ほど、総合的な自立度が高い傾向が見られたことより、自分が親から精神的に自立していると思える人は、他の側面でも自立達成に近い位置にいる傾向があるとわかった。この結果を受けて、どのような学生が親からの自立度が高いのかを明らかにするため、親子関係や家庭環境といった家族背景や学生当人の人間関係における親の位置づけに要因があると考え、分析を行った。家族関係においては、「親への依存度合い」と「母親とのコミュニケーション頻度」の二つが親からの自立の要因であることがわかり、特に後者の影響力が大きいと考えた。家庭環境においては、親の価値観や判断から決められている「親の経済的援助姿勢」と「親のサービス提供姿勢」、「親からの干渉度合い」、親への依存度を通して間接的に影響すると考えられる「父親の学歴」の四つが親からの自立の要因であるとわかった。学生当人の人間関係においては、気を許せる相手として人間関係の中で親よりも友人を高く位置付ける「情緒的サポートに占める友人割合の大きさ」と「アルバイトをしている」の二つが主観的な親からの自立の要因であるとわかった（図 2-1 参照）。学生当人の人との付き合い方の性質においては、「共依存度合い」が「親への依存度合い」を通して影響する間接的な要因であるとわかった。また、「親への依存度合い」と「母親とのコミュニケーション頻度」、「アルバイトをしている」の三つは、総合的な自立の度合いの直接的な要因であるとわかった。

ここで、「親からの自立」の要因と考えられる項目が複数存在していることと、これらの項目同士で互いに相関が見られるものがあることから、疑似相関によって分析結果に「主観的な親からの自立度」との相関が表れた可能性があると考えられる。そこで、上述した八つの項目を独立変数、主観的な親からの自立度を従属変数とした重回帰分析を行った。ステップワイズ法を用いた分析の結果、表 2-1-16 より、「親の経済的援助姿勢」「親からの干渉度合い」「母親とのコミュニケーション頻度」「アルバイトをしている」の四つの項目が親か

らの自立度に相関があるとわかった。よって、疑似相関とは断定できないものの、残りの項目には独立の影響が見られないことになる。そのため、どのように親からの自立度に関係しているのか再度分析していく。

表 2-1-17 より、親への依存度が高い人ほど母親とのコミュニケーション頻度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。また表 2-1-18 より、親のサービス提供姿勢の基準が緩い人ほど母親とのコミュニケーション頻度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。さらに表 2-1-19 より、情緒的サポート得点に占める友人の割合が低い人ほど母親とのコミュニケーション頻度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。これらの結果から、「親への依存度」「親のサービス提供姿勢」「情緒的サポートに占める友人の割合」の三項目は、それぞれが「母親とのコミュニケーション頻度」を通して「主観的な親からの自立度」に影響を及ぼしており、独立の影響がない間接的な要因であることがわかった。また表 2-1-20 より、父親の学歴が大卒である人ほど親への依存度が高く、高卒である人ほど親への依存度が低い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、「父親の学歴」もまた「親への依存度」を通して「主観的な親からの自立度」に影響を通して「総合的な自立度」に影響を及ぼしており、独立の影響がない間接的な要因であることがわかった。



「親からの自立」の視点からとらえた「自立（総合的な自立）」について、本項の分析より得られた結果を図2-1に示した。矢印の向きが影響の方向を表し、同一の要素に対する影響であるかは線の色で区別した。間接的な要因については破線枠内で関係を示し、直接的な要因については、番号により影響の強さの順番を表している。

記述統計

	平均値	標準偏差	N
主観的な親からの自立度	1.3243	.46971	148
親への依存度合い	1.5473	.49945	148
母親とのコミュニケーション頻度の度合い	1.5203	.50129	148
親の経済的援助姿勢	1.2500	.43448	148
親のサービス提供姿勢	1.1486	.35695	148
親からの干渉度合い	1.6081	.48983	148
父親の学歴	2.1959	1.24899	148
情緒サポートに占める友人の割合	1.5946	.49264	148
アルバイトをしている	1.1689	.37595	148

係数^a

	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	1.970	.209		9.418	.000
親の経済的援助姿勢	-.240	.085	-.222	-2.832	.005
親からの干渉度合い	-.197	.074	-.205	-2.677	.008
母親のコミュニケーション頻度の度合い	-.173	.073	-.184	-2.364	.019
アルバイトをしている	.200	.097	.160	2.071	.040

a. 従属変数 主観・親から自立度

※相関係数は5%水準で有意である

表 2-1-16

母親とのコミュニケーション頻度の度合い と 親への依存度合い のクロス表

		親への依存度合い		合計
		高い	低い	
母・コミュ頻度の度合い	高い	度数 39 母・コミュ頻度の度合い の % 52.7%	35 47.3%	74 100.0%
	低い	度数 30 母・コミュ頻度の度合い の % 37.5%	50 62.5%	80 100.0%
合計		度数 69 母・コミュ頻度の度合い の % 44.8%	85 55.2%	154 100.0%

※正確有意確率（片側）：.041 、近似有意確率：.055

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-17

母親とのコミュニケーション頻度の度合い と 親のサービス提供姿勢 のクロス表

		サービス提供		合計
		緩い	厳しい	
母・コミュ頻度の度合い	高い	度数 67 母・コミュ頻度の度合い の % 93.1%	5 6.9%	72 100.0%
	低い	度数 63 母・コミュ頻度の度合い の % 78.8%	17 21.3%	80 100.0%
合計		度数 130 母・コミュ頻度の度合い の % 85.5%	22 14.5%	152 100.0%

※正確有意確率（片側）：.010 、近似有意確率：.009

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-1-18

母親とのコミュニケーション頻度の度合い と 情緒サポートに占める友人の割合 のクロス表

		割合・情緒サポートの友人		合計
		高い	低い	
母・コミュ頻度の 度合い	高い 度数	24	51	75
	母・コミュ頻度の度合いの %	32.0%	68.0%	100.0%
	低い 度数	38	41	79
	母・コミュ頻度の度合いの %	48.1%	51.9%	100.0%
合計	度数	62	92	154
	母・コミュ頻度の度合いの %	40.3%	59.7%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.030 、近似有意確率：.039

相関係数は1%水準で有意である

表 2-1-19

父親の学歴 と 親への依存度合い のクロス表

		親への依存度合い		合計
		高い	低い	
大学	度数	38	28	66
	学歴・父の %	57.6%	42.4%	100.0%
短大・ 高専・ 専門	度数	4	9	13
	学歴・父の %	30.8%	69.2%	100.0%
学歴・父 高校	度数	17	39	56
	学歴・父の %	30.4%	69.6%	100.0%
中学校	度数	3	1	4
	学歴・父の %	75.0%	25.0%	100.0%
わから ない	度数	5	6	11
	学歴・父の %	45.5%	54.5%	100.0%
合計	度数	67	83	150
	学歴・父の %	44.7%	55.3%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.021 、近似有意確率：.032

相関係数は1%水準で有意である

表 2-1-20

第2項 「情緒的人間関係」から見た自立

第1章 第3節 第2項 において、発達過程の若者から見て、両親という存在と友人や特に親密な他者（恋人）の存在がどのように位置づけられるか、「切り替えモデル」と「相補的關係モデル」の二つのモデルが提唱されていることを述べた。個人が対人関係から得る心的安寧を維持・向上させるような存在、またはその存在の行動を「情緒サポート」としたとき、両モデルでは親と友人から得られる情緒的サポート量とバランスに違いがあった。本項では、この「情緒サポート」が現在の大学生の自立過程にどのように影響するかについて分析し、どちらのモデルがより現在の大学生の自立に繋がっているのか明らかにしていく。また、「情緒サポート」を与えてくれる相手とは情緒的人間関係を形成していると捉え、単に話をしたり行動を共にしたり遊んだりする相手を含めた幅広い関係を人間関係としたとき、情緒的人間関係は気を許せる相手との人間関係として区別してとらえている。

調査においては、情緒サポートを与える存在として父親、母親、両親以外の大人、学校の人（小中高の同窓生も含む）、その他の友人、恋人の六つの項目を使用した。両親以外の大人は、具体的には親戚や大学の教授、バイト先や課外活動で知り合った大人などを想定している。その他の友人は、学校以外の場で知り合い友人になった相手を想定している。この二項目は、家庭や学校といった誰もが必ず属していて出会いがある場ではなく、自主的に参加したコミュニティの中である程度積極的に交流を続けることで得られる情緒的關係の相手として、両親や学校の友人とは区別して項目を用意した。また、ある程度積極的に交流を続けることで得られるという点では、恋人も両親や学校の友人とは区別できると考え使用している。サポートの具体的な内容としては、「①心配ごとや悩みを聞いてくれる」「②気持ちや考えを理解し尊重してくれる」「③能力や努力を高く評価してくれる」「④一緒にいて楽しく時間を過ごせる」「⑤助言やアドバイスをしてくれる」「⑥遊びに誘うと気軽に応じてくれる」の六つの項目を使用した（質問紙B）。情緒關係の相手とサポートの内容とを照らし合わせ、それぞれに当てはまる（そういう人が一人でもいる）と思う場合は1点、そうでない場合は0点として、合計点が平均より高い場合は情緒サポート得点が高い、低い場合は情緒サポート得点が低いとした。以下の分析で使用する得点のまとめ方については、情緒關係の相手ごとの個別得点、すべての相手の得点を合わせた「総サポート得点」、父親と母親を合わせた「両親サポート得点」、学校の人とその他の友人を合わせた「友人サポート得点」としている。

まず、総サポート得点と総合的な自立度とのクロス表を作成したが、この二つは関係していなかった。総サポート得点は、情緒的關係を築いた相手、つまり自分に親身になってくれたり自分が気を許せたりするような相手が多いほど、また与えられるサポート内容が多いほど、高くなる。よって、情緒的關係の対象の多さやその相手に多くの情緒サポートを与えもらえるかどうかということは、自立の度合いには関係しないとわかった。この結果を受

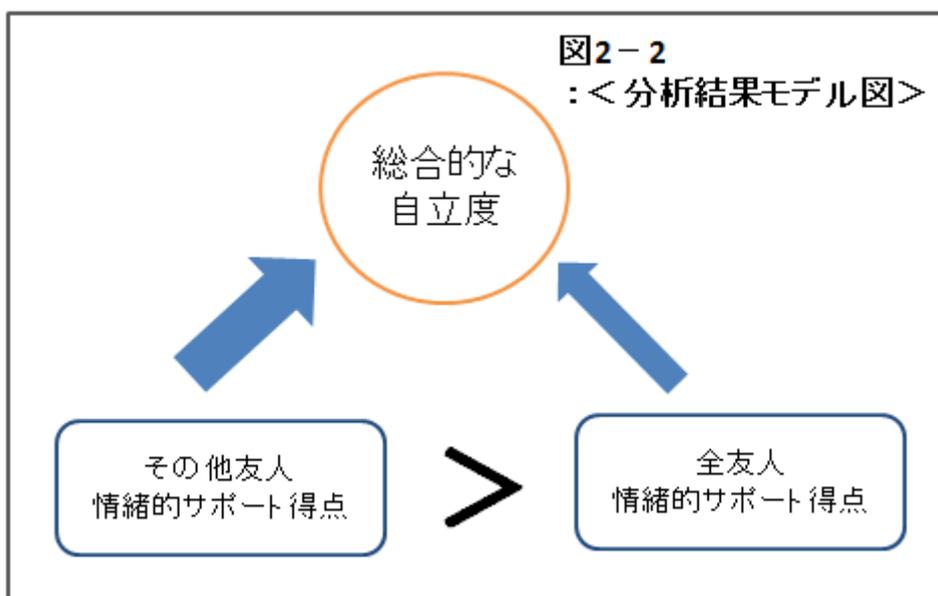
けて、単に情緒的関係の対象が多ければいいのではなく、特定の範囲で情緒的関係を築いているかどうかが自立に影響するのではないかと考え、対象ごとに自立との関係を分析した。

友人との関係を見ると、表 2-2-1 より、友人サポート得点が高い人ほど、総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 10%水準を下回っているため、この結果は有意傾向といえる。ここから、気を許せるような情緒的関係にあたる友人が多いほど、またその関係が深いほど、自立度が高い傾向があると考えられる。また、表 2-2-2 より、その他友人サポート得点が高い人ほど、総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。つまり、学校以外の場所で自主的に友人を得て深い情緒関係を築いている人ほど自立度が高い傾向があるとわかった。ここで、友人の中でも誰もが出会いの機会があると想定できる「学校の人」と、自主的に新たなコミュニティに出向いたり交流したりすることで交友関係を築くと想定できる「その他友人」とでは、自立に及ぼす影響に違いがあるか見るために 3 項目のクロス表を作成した。表 2-2-3 より、学校の人サポート得点の影響にかかわらずその他友人サポート得点が高い人ほど、総合的な自立度が高い傾向があることがわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において学校の人サポート得点が高い人については 10%水準、学校の人サポート得点が低い人については 5%水準をそれぞれ下回っているため、前者の結果は有意傾向、後者は有意といえる。よって、学校の人と学校以外で得た友人とを比べると、後者と情緒的関係を深く築いている人ほど自立度が高い傾向があるとわかった。ただし、順位相関係数(ケンドールのタウ)が前者では.436(0.1%有意)、後者では.141(有意でない)であることから、学校の人サポート得点が高い人については、その他友人サポート得点と総合的な自立度の間にある相関が弱いことがわかる。したがって、学内の友人との情緒的関係の広さや深さにより、学外の友人との関係の必要性が変化すると考えられる。つまり、学外の友人との情緒関係は誰にとっても自立のために必ず必要な要素というわけではなく、学内の友人との情緒関係を築けていないほど重要性が高まる要素だとも言える。したがって、最低限どちらかと深い情緒関係を持っていれば自立には十分であり、両方と関係を持つ場合には関係の深さは重要ではないと考えられる。

次に、両親と両親以外の大人の影響を見る。それぞれについてクロス表を作成したところ、どちらも実数の割合で見ればサポート得点が高い人ほど総合的な自立度が高い傾向が見られたが、有意ではなかったため自立度には関係していないと判断した。また、恋人サポート得点も自立度には関係していなかった。

さて、本項では「情緒的人間関係」の視点から「自立(総合的な自立)」について分析を行った。情緒的人間関係を築いている対象の広さと関係の深さについて「情緒サポート得点」からとらえ分析したところ、自立度と直接的な関係が見られたのは「総友人サポート得点」と「その他友人サポート得点」の二つであった(図 2-2 参照)。友人と深い情緒的関係を

築いているほど自立度が高い傾向があること、さらに学校以外の場で得た友人と深い情緒関係を築いているほどより自立度が高い傾向があることがわかった。一方、両親サポート得点の高低と自立度との関係や、情緒的サポートに占める友人の割合と自立度との関係が見られなかったことから、両親と深く情緒関係を築いていてもそうでなくても、友人との関係で自立度が変わる傾向があるということになり、「切り替えモデル」と「相補的關係モデル」のどちらが現在の大学生の自立に繋がっているか、本調査では明確にはできなかった。ただし、現在の大学生にとって友人との関係がどのようなものであるかが自立過程において重要であり、単に行動を共にする関係ではなく、自分を認めてくれたり気を許せたりするような関係をどれだけ築けるかということが自立に繋がっていると考えられる。また、両親以外の大人や恋人との情緒関係が自立度に関係しなかった一方で、その他友人のサポート得点が自立度に影響していたことから、現在の大学生の自立過程において、重要な「友人」という対象の中で、自主的に情緒関係を築けるかということも自立に繋がっていると考えられる。



「情緒的人間関係」の視点からとらえた「自立（総合的な自立）」について、本項の分析より得られた結果を図2-2に示した。矢印の向きが影響の方向を表し、影響の強さを線の太さで区別した。

友人・サポート得点 と 総合的な自立度合い のクロス表

	総合的な自立度合い	合計
--	-----------	----

		高い	低い	
全友人・サポート得点	高い	度数 38	24	62
		全友人・サポート得点 の % 61.3%	38.7%	100.0%
	低い	度数 47	51	98
		全友人・サポート得点 の % 48.0%	52.0%	100.0%
合計		度数 85	75	160
		全友人・サポート得点 の % 53.1%	46.9%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.069 、近似有意確率：.096

相関係数は 10%水準で有意傾向である

表 2-2-1

その他友人・情緒サポート得点 と 総合的な自立度合い のクロス表

		総合的な自立度合い		合計
		高い	低い	
その他友人・情緒サポート得点	高い	度数 44	23	67
		その他友人・情緒サポート得点 の % 65.7%	34.3%	100.0%
	低い	度数 41	52	93
		その他友人・情緒サポート得点 の % 44.1%	55.9%	100.0%
合計		度数 85	75	160
		その他友人・情緒サポート得点 の % 53.1%	46.9%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.005 、近似有意確率：.006

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-2-2

その他友人・情緒サポート得点 と 総合的な自立度合い と 学校の人・情緒サポート得点 のクロス表

学校の人・情緒サポート得点	総合的な自立度合い	合計
---------------	-----------	----

			高い	低い	
		度数	34	21	55
高い	その他友人・ 情緒サポート 得点	高い	61.8%	38.2%	100.0%
		低い	47.7%	52.3%	100.0%
		合計	65	55	120
		その他友人・情緒サ ポート得点の%	54.2%	45.8%	100.0%
低い	その他友人・ 情緒サポート 得点	高い	83.3%	16.7%	100.0%
		低い	35.7%	64.3%	100.0%
		合計	20	20	40
		その他友人・情緒サ ポート得点の%	50.0%	50.0%	100.0%
合計	その他友人・ 情緒サポート 得点	高い	65.7%	34.3%	100.0%
		低い	44.1%	55.9%	100.0%
		合計	41	52	93
		その他友人・情緒サ ポート得点の%	44.1%	55.9%	100.0%
		度数	85	75	160
		その他友人・情緒サ ポート得点の%	53.1%	46.9%	100.0%

※学校の人情緒サポート得点が低い人について 正確有意確率（片側）：.007、近似有意確率：.002
高い人について 正確有意確率（片側）：.086、近似有意確率：.117
相関係数は1%水準で有意である（得点が高い人については10%水準で有意傾向である）

表 2-2-3

第3項 「居住形態」から見た自立

第1章 第3節 第2項 において、大学生の在学中の離家（実家を離れて暮らす）経験が自立に影響している可能性を述べた。本項では、離家が大学生の自立に繋がっているか、どのような影響を及ぼしているか明らかにするため、居住形態の違いという視点から自立について分析を行う。

第一に、居住形態と自立との直接の関係を見る。まず、居住形態と総合的な自立度のクロス表を作成したがこれらは関係していなかった。そこで、自立を要素ごとに分けて影響を見ることにした。精神的自立度については、総合的な自立度と同様に居住形態との関係が見られなかった。表 2-3-1 より、実家暮らしの人ほど生活的自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、実家暮らしの人ほど規則正しい生活をしていたり将来への備えをしていたりする傾向があるとわかった。これは、離家している人が親の目の届かない暮らしができることを背景に、規則正しい生活から外れて自由に生活するようになるからではないかと考えられる。そこで、親の干渉度と居住形態の違いを見ると、表 2-3-2 より、離家している人ほど親からの干渉度合いが低い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、離家している人は生活や自身の周囲の何かしらについて親から口を出されることが少なく、実際に自由に生活していてもその実態が親や他人の目に届くこともないため、生活的自立度が低い傾向があると考えられる。

次に表 2-3-3 より、実家暮らしの人ほど経済的自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 10%水準を下回っているため、この結果は有意傾向といえる。ここから、実家暮らしの人ほど欲しいものを自分の収入で買うような傾向があると考えられる。これは、大学生になるとお小遣いのように定期的に自由に使えるお金を親からもらう人が少なくなると考えれば、離家をしている人は仕送りを定期的にもらう人が多く、仕送り額によってはお金を自由に使える可能性がある一方、実家暮らしの人はお小遣いに代わって自由に使えるお金の援助がないことが、経済的自立度に小さな影響を及ぼしていると考えられる。

次に表 2-3-4 より、離家している人ほど生活身辺处理的自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、離家している人ほど栄養バランスを考えて食事を作ったり家事を自分でこなしたりしている傾向があるとわかった。これは、離家により親からの生活身辺に関するサポートを手放すことで、家事を担ったり自分の健康に気を遣ったりする必要にかられることを考えれば当然の結果である。しかし、実家暮らしの人が親からの生活身辺サポートを甘受してしまう傾向にあることから、生活身辺处理的自立に繋がるきっかけとして離家に意味があると考えられる。

生活的自立の度合い と 居住形態 のクロス表

		居住形態		合計	
		実家	離家		
生活的自立の度合い	高い	度数	80	52	132
		生活的自立の度合い の %	60.6%	39.4%	100.0%
	低い	度数	7	21	28
		生活的自立の度合い の %	25.0%	75.0%	100.0%
合計		度数	87	73	160
		生活的自立の度合い の %	54.4%	45.6%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.001 、近似有意確率：.001

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-3-1

居住形態 と 親からの干渉度合い のクロス表

		親の干渉度合い		合計	
		高い	低い		
居住形態	実家	度数	42	40	82
		居住形態 の %	51.2%	48.8%	100.0%
	離家	度数	19	51	70
		居住形態 の %	27.1%	72.9%	100.0%
合計		度数	61	91	152
		居住形態 の %	40.1%	59.9%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.002 、近似有意確率：.002

相関係数は 1%水準で有意である

表 2-3-2

経済的自立の度合い と 居住形態 のクロス表

	居住形態	合計

		実家	離家		
経済的自立の度合い	高い	度数	53	32	85
		経済的自立の度合いの %	62.4%	37.6%	100.0%
	低い	度数	34	41	75
		経済的自立の度合いの %	45.3%	54.7%	100.0%
合計	度数	87	73	160	
	経済的自立の度合いの %	54.4%	45.6%	100.0%	

※正確有意確率（片側）：.023、近似有意確率：.029

相関係数は5%水準で有意である

表 2-3-3

身近処理的自立の度合いと居住形態のクロス表

		居住形態		合計	
		実家	離家		
身近処理的自立の度合い	高い	度数	16	68	84
		身近処理的自立の度合いの %	19.0%	81.0%	100.0%
	低い	度数	71	5	76
		身近処理的自立の度合いの %	93.4%	6.6%	100.0%
合計	度数	87	73	160	
	身近処理的自立の度合いの %	54.4%	45.6%	100.0%	

※正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である

表 2-3-4

第二に、親からの自立との関係を見る。表 2-3-5 より、離家している人ほど、主観的に親から自立している人が多い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、実家を出て暮らしている人ほど自分が親から自立していると思っている人が多い傾向があるとわかった。また、表 2-3-6 より、離家している人ほど母親とのコミュニケーション頻度が低い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において5%水準を下回っているため、この結

果は有意といえる。現代では携帯電話や LINE など遠方においてもやり取りできるコミュニケーションツールが広く普及しており、離家している人も実家暮らしの人もこれらのツールを利用できる環境は同じであるが、離家している人ほど母親とやり取りをする頻度が低い傾向があるとわかった。

主観的な親からの自立度 と 居住形態 のクロス表

			居住形態		合計
			実家	離家	
主観・親から自立度	高い	度数	48	58	106
		主観・親から自立度の%	45.3%	54.7%	100.0%
	低い	度数	38	14	52
		主観・親から自立度の%	73.1%	26.9%	100.0%
合計	度数	86	72	158	
	主観・親から自立度の%	54.4%	45.6%	100.0%	

※正確有意確率（片側）：.001、近似有意確率：.001

相関係数は1%水準で有意である

表 2-3-5

居住形態 と 母親とのコミュニケーション頻度の度合い のクロス表

			母・コミュ頻度の度合い		合計
			高い	低い	
居住形態	実家	度数	54	31	85
		居住形態の%	63.5%	36.5%	100.0%
低い	低い	度数	21	50	71
		居住形態の%	29.6%	70.4%	100.0%
合計	度数	75	81	156	
	居住形態の%	48.1%	51.9%	100.0%	

※正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である

表 2-3-6

また、実家暮らしであることに満足している人とそうでない人とでは、何か違いがあるのかということについても見ておく。調査においては、表 2-3-7 より、実家暮らしで親か

らの干渉度合いが高いと思っている人は、現在の居住形態に不満を持つ傾向があるとわかった。実家暮らしの人についてクロス表を見ると、カイ二乗検定において5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。加えて、順位相関係数（ケンドールのタウ）が実家の人では-.231、離家の人では-.084であることから、後者に比べて前者の相関が強いこともわかる。よって、実家暮らしで親から自身の身の回りのことについて口を出されている人ほど、実家暮らしに不満を持ち一人暮らしをしたいと思う傾向があるとわかった。よって、実家暮らしの人の中には親の干渉や実家での生活に不満を持ち、一人暮らしをするために準備をしている人がいるのではないかと考えられる。調査において生活的自立の尺度に用いた「(ウ)将来に備えた蓄え（貯金、生活に役立つ勉強など）をしていない」という逆転項目では、将来に備えた蓄えが何のためのどのようなものなのかという具体的な指定をしなかったため明確に述べることはできないが、一人暮らしを見据えて貯金や知識を蓄えている人がいるのではないかと考えられる。実家暮らしの人の中でも、一人暮らしを希望して将来を見据えているかどうかは生活的自立に繋がっている可能性があると考えられる。

親の干渉度合いと居住形態への考えと居住形態のクロス表

居住形態	居住形態への考え	合計
------	----------	----

			満足	不満	
実家	高い	度数	21	21	42
		親の干渉度合いの%	50.0%	50.0%	100.0%
	低い	度数	29	11	40
		親の干渉度合いの%	72.5%	27.5%	100.0%
	合計	度数	50	32	82
		親の干渉度合いの%	61.0%	39.0%	100.0%
離家	高い	度数	16	3	19
		親の干渉度合いの%	84.2%	15.8%	100.0%
	低い	度数	46	5	51
		親の干渉度合いの%	90.2%	9.8%	100.0%
	合計	度数	62	8	70
		親の干渉度合いの%	88.6%	11.4%	100.0%
合計	高い	度数	37	24	61
		親の干渉度合いの%	60.7%	39.3%	100.0%
	低い	度数	75	16	91
		親の干渉度合いの%	82.4%	17.6%	100.0%
	合計	度数	112	40	152
		親の干渉度合いの%	73.7%	26.3%	100.0%

※実家暮らしの人について

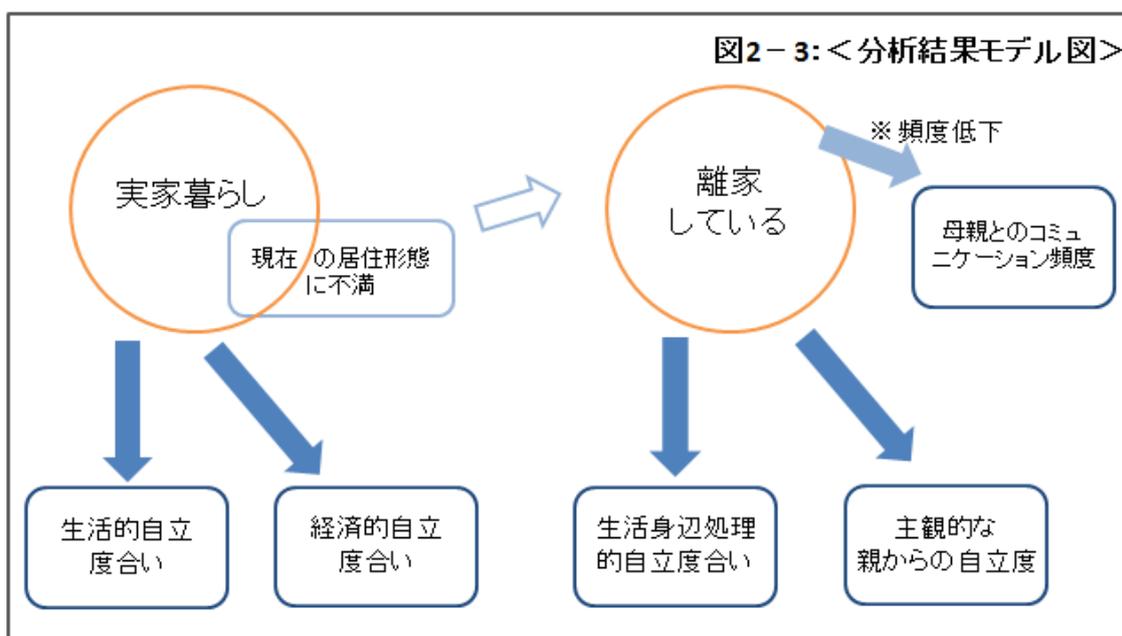
正確有意確率（片側）：.031、近似有意確率：.031

相関係数は5%水準で有意である（離家している人については有意でない）

表 2-3-7

さて、本項では「居住形態」の視点から「自立（総合的な自立）」について分析を行った。居住形態の違いは総合的な自立度については関係していなかったが、自立を要素ごとに分けると居住形態の違いが関係することがわかった（図 2-3 参照）。生活的自立度と経済的自立度については、実家暮らしの人ほど高くなる傾向があるとわかった。この結果には、居住形態により親の干渉度合いと、使い道が自由なお金の援助があるかどうかの違いが生まれることが影響するのではないかと考えた。生活身辺処理的自立度と主観的な親からの自立度については、離家している人ほど高くなる傾向があるとわかった。また、親との関係では離家している人ほど母親とのコミュニケーション頻度が低い傾向があるとわかった。以上より、居住形態の違いは、要素ごとに分けられた自立に対して自立を促す影響と妨げる影響をそれぞれ持っており、どちらがより自立に繋がるか断言することは難しいとわかった。

親と空間的距離を取ることは、本人の力だけでは変えられない環境などの要因から逃れることに繋がる一方、自立にとって有利な要因として親から得られる恩恵を手放すことにも繋がる。よって、自立過程における離家の重要性は、「親の恩恵が無くとも自立を意識した生活を営めるか」などといった本人の意志の強さや性質、「親子関係が相互依存的な状態であるか」などといったそもそもの環境により異なると考えられる。現在の居住形態に対する考えの違いは自立に影響するのかということについては、実家暮らしで親からの干渉度が高い人ほど一人暮らしをしたいと考える傾向があるとわかった。よって、実家暮らしの人の中で一人暮らしを見据えている人については、貯金をしたり、生活に必要な手続きや家事の知識を身につけたりするなど、将来の一人暮らしに向けた準備をすることが生活的自立に繋がっている可能性があると考えられる。



「居住形態」の視点からとらえた「自立（総合的な自立）」について、本項の分析より得られた結果を図2-3に示した。矢印の向きが影響の方向を表し、自立に対する影響と他の要素に対する影響のどちらであるかは線の色で区別した。また、項目が重なっていることは、「実家暮らしの中で居住形態に不満を持っている」という要素の重なりを表している。さらに、「実家暮らしに不満を持つ」ことが「離家」に及ぼす影響は、実際に離家に繋がるのではなく離家を希望するようになるという影響であるため、他の要因の影響と区別して白抜き矢印で表した。

第四項 性格と性別による自立の差

本節では、「親からの自立」「情緒的人間関係」「居住形態」の三つの視点から自立を検討したが、自立度合いには当人の元々の性格が影響している可能性がある。元々の性格により自立度が高いのか、自立度が高くなるにつれ性格が変わっていったのかは明らかにできないが、性格について当人が元から備えている性質であると考えれば、これまでの分析結果には自立と関連を予想していた要素ではなく性格による影響が表れていた可能性がある。そこで本項では、上述した三つの要素が性格の影響を除いても自立度に影響しているか見ていく。

調査においては、近年のパーソナリティ心理学において数多くの知見を積み重ねている Big Five の五つの次元を十項目から測定する Ten Item Personality Inventory (TIPI) の日本語版 (原版 : Gosling, Rentfrow, & Swann 2003 ; 日本語版 : 小塩真司 , 安倍晋吾 , カトローニ ピノ) を用いて、対象者の性格をとらえた (質問紙 A-2 (ア)~(コ))。5つの次元とは外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性である。

表 2-4-1 より、勤勉性が高い人ほど総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、自己統制力や達成への意志の強さが強いような性格の人ほど自立度が高い傾向があるとわかった。また表 2-4-2 より、神経症傾向が低い人ほど総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、不安の強さや物事や感情に対する敏感さの度合いが低いような性格の人ほど自立度が高い傾向があるとわかった。したがって、自立度には「勤勉性」や「神経症傾向」ととらえられる性格が影響していることがわかり、この二種類の性格傾向の影響を確認しておく必要がある。

性格・勤勉性 と 総合的な自立度合い のクロス表

	総合的な自立度合い	合計
--	-----------	----

		高い	低い		
性格・勤勉性	高い	度数	52	25	77
		性格・勤勉性の%	67.5%	32.5%	100.0%
	低い	度数	33	50	83
			性格・勤勉性の%	39.8%	60.2%
合計	度数	85	75	160	
		性格・勤勉性の%	53.1%	46.9%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である

表 2-4-1

性格・神経症傾向 と 総合的な自立度合い のクロス表

		総合的な自立度合い		合計	
		高い	低い		
性格・神経症傾向	高い	度数	38	55	93
		性格・神経症傾向の%	40.9%	59.1%	100.0%
	低い	度数	47	20	67
			性格・神経症傾向の%	70.1%	29.9%
合計	度数	85	75	160	
		性格・神経症傾向の%	53.1%	46.9%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である

表 2-4-2

第一に、第1項で分析した「主観的な親からの自立度合い」と自立度の相関における性格傾向の影響を見る。表 2-4-3 より、勤勉性が高い人についても低い人についても、主観的な親からの自立度が高い人ほど総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。また表 2-4-4 より、神経症傾向が高い人についても低い人についても、主観的な親からの自立度が高い人ほど総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において5%水準を下回っているため、これらの結果は有意といえる。よって、親からの自立度と自立の相関において性格傾向の影響はないとわかった。

第二に、第2項で分析した「友人サポート得点」と自立度の相関における性格傾向の影響を見る。表 2-4-5 より、勤勉性が低い人の中では、友人サポート得点が高い人ほど総合

的な自立度が高い傾向があるとわかった。また表 2-5-6 より、神経症傾向が高い人の中では、友人サポート得点が高い人ほど総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、これらの結果は有意といえる。よって、性格によって、情緒的人間関係の自立に対する影響の仕方が変わることがわかった（交互作用）。つまり勤勉性が低かったり、神経症傾向が高い場合に限り、情緒的人間関係が自立に影響する。逆に言えば、勤勉性が高い、もしくは神経症傾向が低い場合には、友人サポートは自立のためにあまり影響を与えないということがわかった。また、友人サポート得点が高いことは誰にとっても自立のために必ず必要な要素というわけではなく、勤勉性が低いほど、また神経症傾向が高いほど重要性が高まる要素だとも言える。

主観的な親からの自立度 と 総合的な自立度合い と 性格・勤勉性 のクロス表

性格・勤勉性	総合的な自立度合い		合計
	高い	低い	

高い	主観・親から 自立度	高い	度数	45	13	58
			主観・親から自立度の%	77.6%	22.4%	100.0%
		低い	度数	7	11	18
			主観・親から自立度の%	38.9%	61.1%	100.0%
合計			度数	52	24	76
			主観・親から自立度の%	68.4%	31.6%	100.0%
低い	主観・親から 自立度	高い	度数	26	22	48
			主観・親から自立度の%	54.2%	45.8%	100.0%
		低い	度数	6	28	34
			主観・親から自立度の%	17.6%	82.4%	100.0%
合計			度数	32	50	82
			主観・親から自立度の%	39.0%	61.0%	100.0%
合計	主観・親から 自立度	高い	度数	71	35	106
			主観・親から自立度の%	67.0%	33.0%	100.0%
		低い	度数	13	39	52
			主観・親から自立度の%	25.0%	75.0%	100.0%
合計			度数	84	74	158
			主観・親から自立度の%	53.2%	46.8%	100.0%

※勤勉性が高い人について、正確有意確率（片側）：.003、近似有意確率：.005

勤勉性が低い人について、正確有意確率（片側）：.001、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である

表 2-4-3

主観的な親からの自立度 と 総合的な自立度合い と 性格・神経症傾向 のクロス表

性格・神経症傾向	総合的な自立度合い		合計
	高い	低い	

		高い	度数	32	25	57
	主観・親から		主観・親から自立度の%	56.1%	43.9%	100.0%
高い	自立度	低い	度数	6	29	35
			主観・親から自立度の%	17.1%	82.9%	100.0%
合計			度数	38	54	92
			主観・親から自立度の%	41.3%	58.7%	100.0%
	主観・親から	高い	度数	39	10	49
			主観・親から自立度の%	79.6%	20.4%	100.0%
低い	自立度	低い	度数	7	10	17
			主観・親から自立度の%	41.2%	58.8%	100.0%
合計			度数	46	20	66
			主観・親から自立度の%	69.7%	30.3%	100.0%
	主観・親から	高い	度数	71	35	106
			主観・親から自立度の%	67.0%	33.0%	100.0%
合計	自立度	低い	度数	13	39	52
			主観・親から自立度の%	25.0%	75.0%	100.0%
合計			度数	84	74	158
			主観・親から自立度の%	53.2%	46.8%	100.0%

※神経症傾向が高い人について、正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.005

神経症傾向が低い人について、正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.007

相関係数は1%水準で有意である

表 4-2-4

全友人・サポート得点と総合的な自立度合いと性格・勤勉性のクロス表

性格・勤勉性	総合的な自立度合い		合計
	高い	低い	

高い	高い	度数	19	7	26
		全友人・サポート 点の %	73.1%	26.9%	100.0%
	低い	度数	33	18	51
		全友人・サポート 点の %	64.7%	35.3%	100.0%
合計		度数	52	25	77
		全友人・サポート 点の %	67.5%	32.5%	100.0%
低い	高い	度数	19	17	36
		全友人・サポート 点の %	52.8%	47.2%	100.0%
	低い	度数	14	33	47
		全友人・サポート 点の %	29.8%	70.2%	100.0%
合計		度数	33	50	83
		全友人・サポート 点の %	39.8%	60.2%	100.0%
合計	高い	度数	38	24	62
		全友人・サポート 点の %	61.3%	38.7%	100.0%
	低い	度数	47	51	98
		全友人・サポート 点の %	48.0%	52.0%	100.0%
合計		度数	85	75	160
		全友人・サポート 点の %	53.1%	46.9%	100.0%

※勤勉性が低い人について、正確有意確率（片側）：.029、近似有意確率：.031

相関係数は5%水準で有意である（勤勉性が高い人については有意でない）

表 4-2-5

全友人・サポート得点 と 総合的な自立度合い と 性格・神経症傾向 のクロス表

性格・神経症傾向	総合的な自立度合い		合計
	高い	低い	

		高い	度数	21	18	39
	全友人・サポ		全友人・サポート得点の%	53.8%	46.2%	100.0%
高い	ート得点	低い	度数	17	37	54
			全友人・サポート得点の%	31.5%	68.5%	100.0%
	合計		度数	38	55	93
			全友人・サポート得点の%	40.9%	59.1%	100.0%
	全友人・サポ	高い	度数	17	6	23
	ート得点		全友人・サポート得点の%	73.9%	26.1%	100.0%
低い		低い	度数	30	14	44
			全友人・サポート得点の%	68.2%	31.8%	100.0%
	合計		度数	47	20	67
			全友人・サポート得点の%	70.1%	29.9%	100.0%
	全友人・サポ	高い	度数	38	24	62
	ート得点		全友人・サポート得点の%	61.3%	38.7%	100.0%
合計		低い	度数	47	51	98
			全友人・サポート得点の%	48.0%	52.0%	100.0%
	合計		度数	85	75	160
			全友人・サポート得点の%	53.1%	46.9%	100.0%

※神経症傾向が高い人について、正確有意確率（片側）：.026、近似有意確率：.028

相関係数は5%水準で有意である（神経症傾向が低い人については有意でない）

表 2-4-6

第三に、第3項で分析した「居住形態」と親からの自立度合いの相関における性格傾向の影響を見る。表 2-4-7 より、勤勉性が高い人についても低い人についても、離家している人ほど主観的な親からの自立度が高い傾向があるとわかった。また表 2-4-8 より、神経症傾向が高い人についても低い人についても、離家している人ほど主観的な親からの自立度が高い傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において5%水準を下回っているため、これらの結果は有意といえる。よって、居住形態と親からの自立度の相関において性格傾向の影響はないとわかった。

以上より、自立には「勤勉性」と「神経症傾向」という二種類の性格傾向が影響しているが、この影響とは関係なく、「親からの自立」は自立と相関があり「居住形態」は親からの自立と相関があることがわかった。「情緒的關係」と自立の相関についてはこの性格傾向の影響を受けており、勤勉性や神経症傾向について自立に繋がらない性格傾向の人の中でのみ相関があるとわかった。

居住形態 と 主観的な親からの自立度 と 性格・勤勉性 のクロス表

性格・勤勉性			主観・親から自立度		合計
			高い	低い	
高い	実家	度数	27	15	42
		居住形態 の %	64.3%	35.7%	100.0%
	離家	度数	31	3	34
		居住形態 の %	91.2%	8.8%	100.0%
	合計	度数	58	18	76
		居住形態 の %	76.3%	23.7%	100.0%
低い	実家	度数	21	23	44
		居住形態 の %	47.7%	52.3%	100.0%
	離家	度数	27	11	38
		居住形態 の %	71.1%	28.9%	100.0%
	合計	度数	48	34	82
		居住形態 の %	58.5%	41.5%	100.0%
合計	実家	度数	48	38	86
		居住形態 の %	55.8%	44.2%	100.0%
	離家	度数	58	14	72
		居住形態 の %	80.6%	19.4%	100.0%
	合計	度数	106	52	158
		居住形態 の %	67.1%	32.9%	100.0%

※勤勉性が高い人について、正確有意確率（片側）：.006 、近似有意確率：.002

勤勉性が低い人について、正確有意確率（片側）：.027 、近似有意確率：.027

相関係数はそれぞれ 1%水準で有意、5%水準で有意である

表 2-4-7

居住形態 と 主観的な親からの自立度 と 性格・神経症傾向 のクロス表

性格・神経症傾向	主観・親から自立度		合計
	高い	低い	

高い	実家	度数	25	22	47
		居住形態の%	53.2%	46.8%	100.0%
	離家	度数	32	13	45
		居住形態の%	71.1%	28.9%	100.0%
	合計	度数	57	35	92
		居住形態の%	62.0%	38.0%	100.0%
低い	実家	度数	23	16	39
		居住形態の%	59.0%	41.0%	100.0%
	離家	度数	26	1	27
		居住形態の%	96.3%	3.7%	100.0%
	合計	度数	49	17	66
		居住形態の%	74.2%	25.8%	100.0%
合計	実家	度数	48	38	86
		居住形態の%	55.8%	44.2%	100.0%
	離家	度数	58	14	72
		居住形態の%	80.6%	19.4%	100.0%
	合計	度数	106	52	158
		居住形態の%	67.1%	32.9%	100.0%

※神経症傾向が高い人について、正確有意確率（片側）：.060、近似有意確率：.000

神経症傾向が低い人について、正確有意確率（片側）：.071、近似有意確率：.000

相関係数はそれぞれ10%水準で有意傾向、1%水準で有意である

表 2-7-8

また、先行研究で自立の性差について触れられていることから、本論でも自立に性別の影響があると考え注意して見なければならぬと考えた。そこで、性別と自立度の関係や、これまでの分析から自立に繋がると判断できた要素と性別との関係を見る。

まず性別と総合的な自立度の関係を見たが、これらは関係していなかった。要素ごとの自立度についても性差は見られなかった。

次に、親や友人との関係について見る。表 2-4-9 より、男子生徒ほど母親とのコミュニケーション頻度が低い傾向があることがわかり、表 2-4-10 より、男子生徒ほど親への依存度が低い傾向があることがわかった。親からの自立度を見ると表 2-4-11 より、男子生徒ほど主観的な親からの自立度が高い傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において5%水準を下回っているため、これらの結果は有意といえる。親との信頼関係の度合について、性差は見られなかった。また表 2-4-12 より、カイ二乗検定

において有意ではないものの実数の割合を見ると、情緒サポート得点に占める友人の割合が低い人が、女子生徒に多いことがわかった。以上より、男子生徒はどちらかといえば親よりも友人と情緒的人間関係を深く築いており、親と情緒的な繋がりを築いていても頻繁にやり取りをしたり行動を共にしたりすることが少ない傾向にあり、これらを背景として親と依存に陥らない関係を築き、親からの自立度が高い傾向があると考えられる。一方、女子生徒は親との情緒的な繋がりが深く、特に母親とは心理的側面だけでなくコミュニケーションにおいても深い繋がりを持つ傾向があり、これらを背景に親への依存度が高い傾向があると考えられる。

性別と母親とのコミュニケーション頻度の度合いのクロス表

		母・コミュ頻度の度合い		合計	
		高い	低い		
性別	男性	度数	9	40	49
		性別の%	18.4%	81.6%	100.0%
性別	女性	度数	65	41	106
		性別の%	61.3%	38.7%	100.0%
合計		度数	74	81	155
		性別の%	47.7%	52.3%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.000、近似有意確率：.000

相関係数は1%水準で有意である

表 2-4-9

性別と親への依存度合いのクロス表

	親への依存度合い		合計
	高い	低い	

性別	男性	度数	13	36	49
		性別の%	26.5%	73.5%	100.0%
性別	女性	度数	56	51	107
		性別の%	52.3%	47.7%	100.0%
合計		度数	69	87	156
		性別の%	44.2%	55.8%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.002、近似有意確率：.001

相関係数は1%水準で有意である

表 2-4-10

性別と主観・親から自立度のクロス表

		主観・親から自立度		合計	
		高い	低い		
性別	男性	度数	41	8	49
		性別の%	83.7%	16.3%	100.0%
性別	女性	度数	65	43	108
		性別の%	60.2%	39.8%	100.0%
合計		度数	106	51	157
		性別の%	67.5%	32.5%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.002、近似有意確率：.001

相関係数は1%水準で有意である

表 2-4-11

性別と情緒サポートに占める友人割合のクロス表

		割合・情緒サポートの友人		合計
		高い	低い	

性別	男性	度数	21	26	47
		性別の%	44.7%	55.3%	100.0%
性別	女性	度数	41	69	110
		性別の%	37.3%	62.7%	100.0%
合計		度数	62	95	157
		性別の%	39.5%	60.5%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.244、近似有意確率：.390

相関係数は有意でない

表 2-4-12

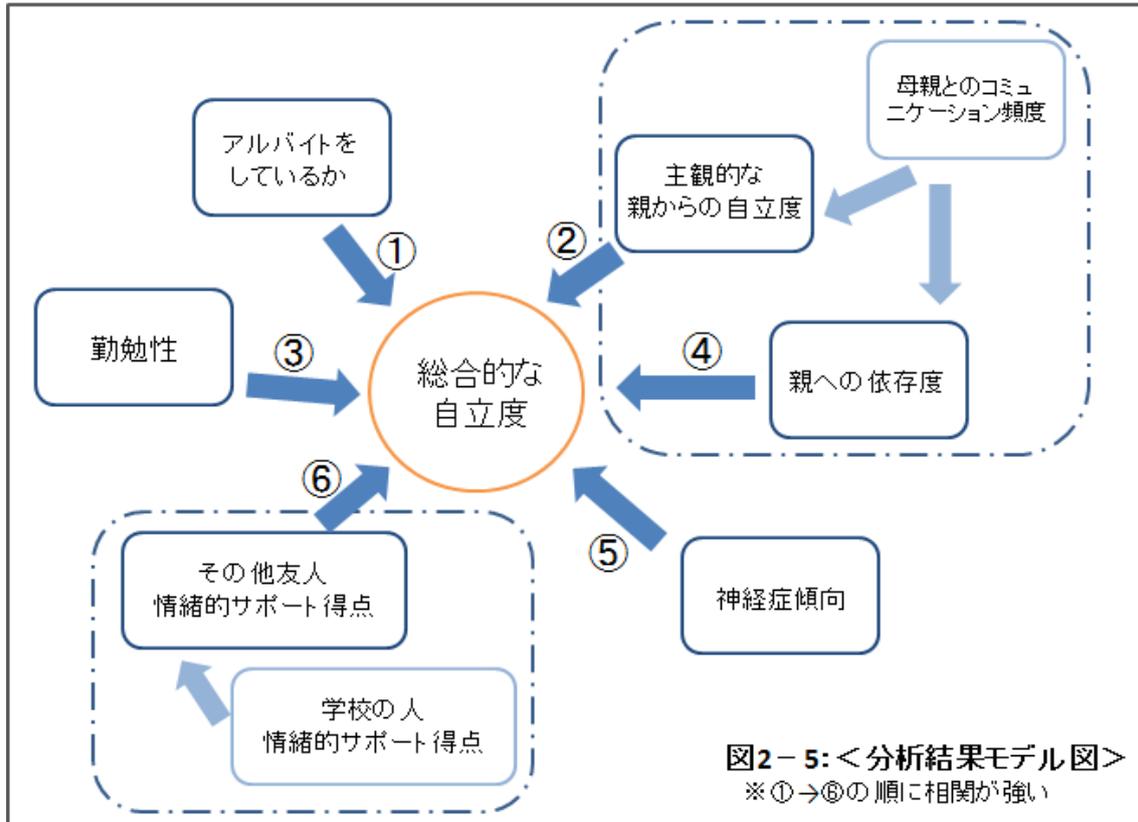
以上より、本論の調査において自立の大きな性差は見られなかった。しかし、これまでの分析で自立に関係するとわかった要素のいくつかには性別の違いが見られた。親からの自立には性別の違いが影響し、男子生徒ほど自分が親から自立していると思っている傾向があるとわかった。この背景として、第1項で親からの自立に相関が見られた「母親とのコミュニケーション頻度」と「親への依存度」について、男子生徒ほど頻度が低く依存度も低い傾向があるとわかった。また、第2項で分析した情緒的人間関係の一部についても性別の違いが影響しており、有意な傾向が見られたわけではないものの、実数の割合では女子生徒ほど「情緒サポート得点に占める友人の割合」が低い人が多いことがわかった。よって、友人や親との付き合い方には性別の違いが影響しており、男子生徒はどちらかといえば親よりも友人と情緒的に深い関係を築き、親とは依存に陥らない程度の距離感のある関係を築くことにより親から自立していく傾向があるとわかる。女子生徒は、どちらかといえば友人よりも親と情緒的關係を築き、依存関係にあたるほど親と深い繋がりを持っている傾向があるとわかる。第一章 第三節 第二項 において述べた情緒的人間関係モデルについて、どちらが自立に繋がっているかということは第二項の分析と同様に本項でも明らかにはできなかったが、「モデルの違い」と近い「周囲の人との付き合い方の違い」にはやや男女差が見られた。

第五項 総合的な自立度における疑似相関の確認

「総合的な自立度」に影響を及ぼしていると考えられる項目が複数存在していることと、

これらの項目同士で互いに相関が見られるものがあることから、疑似相関によって分析結果に「総合的な自立度」との相関が表れた可能性があると考えられる。そこで、「主観的な親からの自立度」「親への依存度」「母親とのコミュニケーション頻度」「学校の人サポート得点」「その他友人サポート得点」「アルバイトをしている」「勤勉性」「神経症傾向」の八つの項目を独立変数、「総合的な自立度」を従属変数とした重回帰分析を行った。ただし、総合的な自立度に影響を及ぼしている「全友人サポート得点」については、「その他友人サポート得点」と重複関係にあるため、全友人サポート得点に含まれるもう一つの要素である「学校の人サポート得点」を独立変数に含めている。ステップワイズ法を用いた分析の結果、表 2-5-1 より、「主観的な親からの自立度」「親への依存度」「その他友人サポート得点」「アルバイトをしている」「勤勉性」「神経症傾向」の六つの項目が総合的な自立度に相関があるとわかった。よって、疑似相関とは断定できないものの、残りの項目には独立の影響が見られないことになる。そのため、どのように総合的な自立度に関係しているのか再度分析していく。

表 2-5-2、表 2-5-3 より、母親とのコミュニケーション頻度が高い人ほど親への依存度が高く、主観的な親からの自立度が高い傾向があるとわかった。これらのクロス表を見るとカイ二乗検定において 5%水準を下回っているため、この結果は有意といえる。よって、「母親とのコミュニケーション頻度」は、「親への依存度」や「主観的な親からの自立度」を通して「総合的な自立度」に影響を及ぼしており、独立の影響がない間接的な要因であることがわかった。また、表 2-5-4 より、学校の人サポート得点が低い人ほどその他友人サポート得点が低い傾向があるとわかった。クロス表を見るとカイ二乗検定において 10%水準を下回っているため、この結果は有意傾向といえる。ここから、「全友人サポート得点」は、「その他友人サポート得点」を通して「総合的な自立度」に影響を及ぼしていると考えられ、独立の影響がない間接的な要因であることがわかった。



「自立（総合的な自立）」について、本節の分析全体より得られた結果を図2-5に示した。矢印の向きが影響の方向を表し、同一の要素に対する影響であるかは線の色で区別した。間接的な要因については破線枠内で関係を示し、直接的な要因については、番号により影響の強さの順番を表している。

記述統計

	平均値	標準偏差	N
総合的な自立度合い	1.4675	.50057	154
主観的な親からの自立度	1.3182	.46729	154
親への依存度合い	1.5519	.49892	154
母親とのコミュニケーション頻度の度合い	1.5195	.50125	154
その他友人サポート得点	1.5909	.49327	154
学校の人サポート得点	1.2468	.43253	154
アルバイトしている	1.1623	.36996	154
性格・勤勉性	1.5065	.50159	154
性格・神経症傾向	1.4286	.49649	154

係数^a

	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	.610	.236		2.584	.011
バイトしている	.391	.089	.289	4.401	.000
主観・親から自立度	.242	.073	.226	3.317	.001
性格・勤勉性	.204	.066	.204	3.095	.002
親への依存度合い	-.158	.067	-.158	-2.372	.019
性格・神経症傾向	-.190	.066	-.188	-2.857	.005
その他友人・情緒サポート得点	.185	.066	.182	2.806	.006

a. 従属変数 総合的な自立度合い

※相関係数は5%水準で有意である

表 2-5-1

母親とのコミュニケーション頻度の度合いと親への依存度合いのクロス表

		親への依存度合い		合計
		高い	低い	
母・コミュ頻度の度合い	高い	度数 39 母・コミュ頻度の度合い の % 52.7%	35 47.3%	74 100.0%
	低い	度数 30 母・コミュ頻度の度合い の % 37.5%	50 62.5%	80 100.0%
合計		度数 69 母・コミュ頻度の度合い の % 44.8%	85 55.2%	154 100.0%

※正確有意確率（片側）：.041、近似有意確率：.055

相関係数は5%水準で有意である

表 2-5-2

母親とのコミュニケーション頻度の度合いと主観・親から自立度のクロス表

		主観・親から自立度		合計
		高い	低い	
母・コミュ頻度の度合い	高い	度数 41 母・コミュ頻度の度合い の % 55.4%	33 44.6%	74 100.0%
	低い	度数 64 母・コミュ頻度の度合い の % 79.0%	17 21.0%	81 100.0%
合計		度数 105 母・コミュ頻度の度合い の % 67.7%	50 32.3%	155 100.0%

※正確有意確率（片側）：.001、近似有意確率：.001

相関係数は1%水準で有意である

表 2-5-3

学校の人サポート得点 と その他友人サポート得点 のクロス表

			その他友人・情緒サポート得点		合計
			高い	低い	
学校の人・サポート得点	高い	度数	55	65	120
		学校の人・サポート得点 の %	45.8%	54.2%	100.0%
合計	低い	度数	12	28	40
		学校の人・サポート得点 の %	30.0%	70.0%	100.0%
		度数	67	93	160
		学校の人・サポート得点 の %	41.9%	58.1%	100.0%

※正確有意確率（片側）：.057 、近似有意確率：.068

相関係数は 10%水準で有意傾向である

表 2-5-4

第 3 節 調査結果

本節では、第 2 節のアンケート分析から調査結果をまとめていく。分析の目的は、大学生の自立過程を検討するにあたり、親との関係、家庭の経済環境といった家族背景や、所有する人間関係の違いなどが自立の度合いに影響するか、明らかにすることであった。先行研究から、親と心理的に適切な距離関係であること、親子関係と対照的に友人など周囲の人との関係が広がっていること、親から空間的距離をとって生活していること、という大まかに三つの要素が自立に影響すると予想し、これに対応して第 2 節では「親からの自立」「情緒的人間関係」「居住形態」という三つの視点から分析を行った。自立の度合いについては、先行研究をもとに精神的自立、生活的自立、経済的自立、生活身辺处理的自立という複数の要素の尺度を用いて、因子分析や信頼性分析より「総合的な自立度」の尺度を用意してとらえた。

第 1 項において、主観的な親からの自立度と総合的な自立度の関係についてクロス表を用いて分析したところ、有意な結果が見られたため、親から自立していると本人が感じていることは自立に繋がっているとわかった。

それではどのような人が主観的な親からの自立度が高くなるのかということについて、親子関係や家庭環境といった家族背景と、本人の人間関係における親の位置づけや、人との付き合い方の性質が関係するのではないかと考え、クロス表による分析を行った。有意な結

果として、まず母親とのコミュニケーション頻度が低い人ほど親からの自立度が高い傾向があるとわかった。これは、父親とのコミュニケーション頻度が親からの自立度に関係していなかったことから、父親に比べて母親との関係では、やり取りや行動を共にすることが心理的距離を近づけることに繋がりやすいためだと考えた。次に、親の経済的援助姿勢の基準が厳しい人ほど主観的な親からの自立度が高い傾向があるとわかった。親の暮らし向きの良し悪しが経済援助姿勢とも親からの自立度とも関係していなかったことから、援助の基準は家庭の経済状況より親の価値観や判断から決まると考えられる。よって親の経済的援助姿勢は、経済的要因というよりは育ちの環境という要因として、親からの自立に関係すると思った。また、親からの干渉度が低い人ほど親からの自立度が高い傾向があるとわかった。これは、当人の身の周りの何かしらについて親から口を出されることが、いまだ親の庇護下もしくは管理下にあると感じさせるため、親からの自立度に関係すると思った。さらに、アルバイトをしている人ほど親からの自立度が高い傾向があるとわかった。これは、アルバイトをすることが新たな友人関係をつくることに繋がるため、親からの自立に影響すると予想して行った分析であったが、アルバイトをしていることと情緒的な人間関係の広さや深さとの関係が見られなかったため、この予想は誤りであった。本論の調査からは明らかにできないが、アルバイトをすることで、働き社会に出る疑似体験をすることや、自分の稼ぎを得ることで親に経済的に完全に頼らず済むようになることが要因となり、親からの自立に影響したのではないかと考えた。

また、主観的な親からの自立度についてクロス表の分析結果では相関が見られたが、重回帰分析の結果から独立の影響がないとわかった項目もある。親への依存度と親のサービス提供姿勢、情緒的サポート得点における友人の割合の三項目については、重回帰分析より有意な結果が見られず、クロス表の分析より母親とのコミュニケーション頻度との相関について有意な結果が見られた。よって、これらの三項目は親からの自立度に対し、母親とのコミュニケーション頻度を通して影響するような関係を持つとわかった。この結果の要因として、家庭における家事などのサービス提供を母親が担うことが多く、サービス提供を多く受けるほど母親とのやり取りが増えるということが考えられる。また、母親はやり取りが増えるほど心理的距離が近づきやすいと考えられるため、親への依存度が高かったり友人よりも親と情緒的関係を深く築いていたりするほど、母親とのやり取りが多くなる、もしくは逆の方向からの影響があるということが考えられる。次に、父親の学歴の項目については、重回帰分析より有意な結果が見られず、クロス表の分析より親への依存度との相関について有意な結果が見られた。父親が大卒の人ほど依存度が高く、高卒の人ほど依存度が低い傾向が見られたことから、親が現在の大学生と同年代だった頃に学生であったか社会人であったかという違いにより、子どもに甘えを許しやすかったり寄り添う接し方をしたりするような違いが生まれるのではないかと考えた。以上より、父親の学歴は親からの自立度に対し、親への依存度を通し、さらに母親とのコミュニケーション頻度を通して影響するような関係を持つとわかり、その要因は父親の学歴による経験や価値観の違いが、子どもの依存を

許しやすいかという違いを生むことではないかと考えた。

また、先行研究で自立に男女差があると示されていたことから、性別と各自立度についてクロス表による分析を行った。有意な結果として、男子生徒ほど親からの自立度が高い傾向があるとわかった。一方、総合的な自立度や他の要素ごとの自立度については男女差が見られなかった。そこで、親からの自立度と相関のある項目についても男女差が見られるか分析したところ、男子生徒ほど母親とのコミュニケーション頻度が低く、親への依存度も低い傾向があるとわかった。よって、男子生徒は依存に陥らない程度に距離感のある関係を親と築くことにより、親からの自立度が高い傾向があるとわかった。

第2項では、二つの情緒的人間関係の移行モデルのどちらがより自立に繋がっているか明らかにするため、関係の深さや対象の広がりや「情緒サポート得点」からとらえ、移行モデルに沿った項目と総合的な自立度についてクロス表による分析を行った。また、自主的に参加したコミュニティの中で、ある程度積極的に交流を続けることで獲得できる情緒的關係の有無や深さも自立に関係するのではないかと考え、これについてもクロス表による分析を行った。有意な結果として、学校以外の場所で得た「その他友人」のサポート得点が高い人ほど総合的な自立度が高い傾向があるとわかった。また、有意傾向である結果として、学校で得た友人である「学校の人」とその他友人とを合わせた全友人のサポート得点が高い人ほど、総合的な自立度が高い傾向が見られた。そこで、学校の人とその他友人どちらとも情緒的關係を築いている場合には、その他友人と深く情緒的關係を築いている人の方がより自立度が高くなるのではと予想し、学校の人サポート得点を層に置いた三項目のクロス表を分析した。結果として、学校の人サポート得点が低い人については有意、高い人については有意傾向ということがわかったため、学校の友人と情緒的關係を深く築いている人にとって、その他友人との情緒的關係の有無は大きくは影響しておらず、この予想は正しいとはいえなかった。以上より、友人と深い情緒的關係を築いているほど自立度が高い傾向があり、さらに学校以外の場で得た友人と深い情緒關係を築いているほどより自立度が高い傾向があることがわかった。また、自主的に参加したコミュニティ内で積極的に交流することにより得られる情緒的關係が自立に繋がると言えるが、両親以外の大人や恋人の情緒サポート得点は自立と影響が見られなかったことから、大学生の自立過程において最も重要なのは友人という対象であり、この対象範囲の中で自主的に関係を築けるかということが、より自立度を高めていると考えた。

二つの情緒的人間関係の移行モデルのどちらが自立に繋がっているかについては、両親のサポート得点の高低、サポート得点における友人の割合、恋人のサポート得点、の三項目と総合的な自立度の関係が見られなかったことから、判断できなかった。よって本論の調査においては、自立に対し情緒的モデルの違いの影響は見られなかった。また、先行研究では、あてはまる移行モデルについて男女による違いが見られていたが、本論の調査では、情緒サポート得点について男女差の有意な結果は出ず、モデルの男女差が見られなかった。実数の割合としては、情緒サポート得点における友人の割合が女子生徒ほど低いという違いが見

られたが、この結果から「男子生徒は情緒的関係の対象を親から友人へと切り替えていく「切り替えモデル」が多く、親との情緒的関係の深さを変えずに保っていると考えられる女子生徒は「相補的關係モデル」が多い傾向がある」とは言えない。この結果は、調査対象の男女比が同等でなく、男性のサンプルが少なかったために出た可能性もあるが、先行研究が学卒後の若者を調査対象としていたことから、この男女差が収入の高い男性と低い女性という経済的背景による男女差であり、在学中で収入差が男女に表れにくい大学生の調査では大きな差が見られなかったとも考えられる。

第3項では、居住形態と総合的な自立度の関係についてクロス表を用いて分析したところ、有意な結果が見られなかったため、自立を要素ごとに分けて再度分析を行った。有意な結果として、まず実家暮らしの人ほど生活的自立度と経済的自立度が高い傾向があることがわかった。これは、実家暮らしの人は親の目が届く環境にいるため規則正しい生活をすることが多く、またお小遣いに代わる使い道が自由なお金の援助が得られにくいいため、自分の収入で欲しいものを買うことが多いためではないかと考えた。次に、離家している人ほど生活身辺处理的自立度が高い傾向があるとわかった。離家している人は自分の健康を気にしたり家事をこなしたりする必要に迫られるため、この結果は当然のものだといえるが、実家暮らしの人が親からの生活身辺サポートを甘受してしまう傾向にあることから、離家が生活身辺处理的自立に繋がるきっかけであると考えた。次に、離家している人ほど主観的な親からの自立度が高い傾向があり、親との関係では、母親とのコミュニケーション頻度が低い傾向、親からの干渉度が低い傾向があるとわかった。よって、離家は親からの自立を通して、総合的な自立度に間接的に影響を与えていることがわかった。

以上より、居住形態の違いは、要素ごとに分けられた自立に対して自立を促す影響と妨げる影響をそれぞれ持っていることから、どちらがより自立に繋がるかという判断が難しく、当人がどのような側面の自立度が低くどのような環境に現在身を置いているのかにより、居住形態から受ける影響が異なるということがわかった。

また、総合的な自立度と相関が見られた複数の項目のうち、同時に総合的な自立度への相関を見ると、「一方の要素の違いによって他方の要素の相関の強さが異なる」という結果が見られた項目もある。親の依存度と母親とのコミュニケーション頻度を同時に見ると、母親とのコミュニケーション頻度が高い人については「親への依存度が低いほど総合的な自立度が高くなる傾向」について有意な結果が得られなかった。同様に、学校の人サポート得点が高い人については「その他友人サポート得点が高いほど総合的な自立度が高くなる傾向」について有意傾向という結果が得られ、勤勉性が高い人や神経症傾向が低い人については「友人サポート得点が高いほど総合的な自立度が高くなる傾向」について有意な結果が得られなかった。つまり、親への依存度が低いことは誰にとっても自立のために必ず必要な要素というわけではなく、母親とのコミュニケーション頻度が高いほど重要性が高まる要素だとも言える。同様のことがその他友人サポート得点や友人サポート得点にも言える。以上

より、総合的な自立には調査で相関が見られた要素の全てが必要というわけではなく、ある要素が不足している人には他の要素の重要性が高まるというような特徴があり、複数の要素が不足しているほど一つ一つの要素の達成度の深さが重要になり、反対に複数の要素を得ている人は一つ一つの要素の達成度の深さに関わらず自立度が高くなるという特徴があるのではないかと考えられる。

また、総合的な自立度についてクロス表の分析結果では相関が見られたが、重回帰分析の結果から独立の影響がないとわかった項目もある。母親とのコミュニケーション頻度については、重回帰分析より有意な結果が見られず、クロス表の分析より親への依存度や主観的な親からの自立度との相関について有意な結果が見られた。よって、母親とのコミュニケーション頻度は総合的な自立度に対し、親への依存度や主観的な親からの自立度を通して影響するような関係を持つとわかった。この結果の要因として、母親はやり取りが増えるほど心理的距離が近づきやすいと考えられるため、やり取りが多くなるほど親への依存度が高くなったり、当人が親から自立していないと思ったりするような影響、もしくは逆の方向からの影響があると考えられる。全友人サポート得点についてもまた、重回帰分析より有意な結果が見られず、クロス表の分析よりその他友人サポート得点との相関について有意な結果が見られた。よって、全友人サポート得点は総合的な自立度に対し、その他友人サポート得点を通して影響するような関係を持つとわかった。その他友人とは学校のように誰もが属する場ではなく、自主的に参加したコミュニティで得た友人であるため、その他友人と深く情緒的サポートを築いている人は、自分と気の合いそうな人を見つけたり積極的に人と仲を深められたりするような能力の高い人が多いと考えられる。よって、そのような能力を持っているから全体的な友人の数が多くなったり、情緒関係を深められていたりする、あるいは反対に、全体的な友人の数が多く人間関係を広げる経験が豊かであるからそのような能力が育った、というような関係が考えられ、この関係により総合的な自立度に間接的な影響を与えているのではないかと考えられる。

さらに、前述した通り、親への依存度や学外の友人との情緒的関係の深さや広さが、誰にとっても自立に必要な要素ではなかったことを考えると、母親とのコミュニケーション頻度と全友人サポート得点が非独立の要因として除外された背景には、自立に関係する項目同士の相補的な関係があると考えられる。つまり、基本的には「親への依存度が低ければ、自立しやすくなる」傾向があり、「より多くの学外の友人と深い情緒関係を持っていれば、自立しやすくなる」傾向があるが、そうでなくても、母親とのコミュニケーションが過剰でなかったり、学内の友人とより深い情緒関係を持っていれば、これらの要素で補えるということだ。このような相補的な関係により、重回帰分析においては上述した二つの項目が非独立の要因と除外される結果となったと考えられる。

第3章 大学生の望ましい自立に向けて

第2章では、アンケート調査の目的の一つとして、どのような要素が大学生の自立過程に影響し自立に繋がっているのかを、SPSSによる調査結果の分析を通して明らかにした。本章では、調査のもう一つの目的である「現在の大学生が想定する望ましい自立のあり方」を明らかにし、大学生が学卒後の自立に向けて、どのようなことを意識して自立過程を進めば、問題を抱えることなく自立できるのかについて提示することで、本論の結論としたい。

第1節 大学生が思う望ましい自立の姿

第1章第3節において、望ましい自立がどのようなものであるかはその時々文化や社会により異なると述べた。よって、現在人々が理想と思っている「自立」は本論においても理想の「自立」であると認識できると考え、調査においては自立に関して直接の定義を示さないまま回答を得た。本節では、「あなたにとって、自立しているとはどのような状態ですか？」という項目（質問紙C-1(ソ)）の自由記述回答から、現在の大学生が理想と思っている「自立」がどのようなものであるかについて、考察していく。また、在學生と卒業生の回答を比較し、望ましい自立について大学生と社会に出た若者とで違いがあるかについても確認する。

第1章第3節において、本論では自立について複数の要素からとらえると述べ、第2章第2節の冒頭で具体的に自立をどのような要素に分類するかについて述べた。得られた自由記述回答を見ると、分類した要素それぞれに対応する内容であると判断できるため、「精神的自立」「生活的自立」「経済的自立」「生活身辺処理的自立」「親からの自立」の要素ごとに回答内容を分類し、以下にその抜粋をまとめていく。

○精神的自立

<在學生>

- ・自分の軸となる意見・意志を持って行動し、それをはっきり伝え合える。
- ・人の助言や意見を受容できるが、自分だけで物事を決められ責任をもてる状態。
- ・自ら他人の助けを欲しがろうとしないが、困ったときは適切なところを判断し助けを求められる柔軟性もある。
- ・自分をコントロールでき、何事も一人で決められ、誰かに依存していない。
- ・支えられることよりも支えることが多くなり、他者を気遣う余裕ももてる。
- ・自分に協力してくれる人を得ていたり、人間関係を自分から広げられる。

<卒業生>

- ・自身の価値観を言葉にして伝えることができる。
- ・自分の考えや判断で、必要なときに一人で行動を始められる。
- ・ある一定の依存した対象がいなくても生活する上で支障がない状態。

○生活的自立

<在学生>

- ・普段の生活で時間配分やスケジュール管理ができる。
- ・早寝、早起き、朝食を食べる、といった規則正しい生活を継続している状態。
- ・生活上必要な手続き、管理を自分で行っている。

<卒業生>

- ・何かの期限が定められているとき、時間配分に気を配り余裕をもって取り組める
- ・継続的に貯金している

○経済的自立

<在学生>

- ・アルバイトをしている。ほしいものを自分の収入で買える状態。
- ・生活に必要な収入が自分で得られること。
- ・経済的に自分で管理し安定している状態。
- ・経済的に全て自分で賄うことができ、やりくりできること。

<卒業生>

- ・就職していて、自分で働いて得た収入だけで生活している状態。
- ・収入が安定している。
- ・自分の収入を把握し、使い道やローンの組み方を考えることができ、やりくりできる。

○生活身辺処理的自立

<在学生>

- ・一人暮らしでき、身の周りのことをこなせる。
- ・料理、掃除、洗濯など一通りの家事や、衣食住の管理を自分一人で行える。
- ・生活していく上で必要なこと（家事など）の基本ができる。
- ・一人で家事全般を完璧にこなし、生活活動が自己完結している。

<卒業生>

- ・一人暮らしをしていて、生活管理が行える状態。
- ・炊事、掃除といった家事を自分で行う、家事を怠らない。

○親からの自立

<在学生>

- ・経済的・精神的に親に頼らない、親に頼らなくても生きていける状態。
- ・親の助言なしで行動でき、親の言うことに縛られない人。
- ・今すぐ親が死んだとしてもそのままの暮らしを続けていける状態。
- ・親は他人だと認め、親からも子がひとりの人間で他人だと認識された上で、互いに対等な立場で尊敬し合えること。お互いに感謝の気持ちを持つこと。
- ・金銭的援助や助言を求めたり家事を担ってもらうなど、親や誰かに現在頼っていても、その人がいなくなった後に自分がどうすべきか理解している人。

<卒業生>

- ・経済的な依存から脱却して、自身の行動の理由を親に対して求めない。
- ・苦しいことがあっても親の前で取り乱さない。
- ・親以上に頼りにできる人や信頼できる人を得ている。

回答内容をまとめたところ、本論で扱った要素ごとの自立すべてに対し、それぞれ当てはまる内容の回答があった。本論では先行研究をもとに、複数の要素を用いることで自立をおおよそとらえることができるとして調査を行ってきたが、現在の大学生にとっても自立は性格の異なる複数の要素から成るものだと認識されていることがわかる。中でも具体的な内容の回答が多かったものは、「精神的自立」「経済的自立」「親からの自立」に分類されると判断できる回答であり、特に「親からの自立」については、「経済的・精神的に親に頼らない」や「金銭的援助や助言を求めたり家事を担ってもらうなど、親や誰かに現在頼っていても～（略）」というように、複数の要素の自立にまたがった内容が多くあり、大学生にとって親から自立することが理想的な「自立」の中でも大きな割合を占めていると考えられる。

それぞれの要素の自立について具体的な回答内容を見ると、まず精神的自立については、自分の確固たる考えを持っていること、その考えを他者に発信できること、その考えに基づいて自分で物事を決定できること、行動に責任を持っていること、という自分自身の意思決定や行動に関する内容が最も多い回答であった。また、誰かに依存していないこと、人間関係を築けること、他者の意見を受容し助けあえること、他者を気遣えること、という周囲の人との付き合い方に関する回答内容も見られた。これらの回答について在学生と卒業生とで大きな違いは見られなかった。

次に生活的自立度について見ると、早寝早起きといった健康的な生活をしていること、生活において時間管理がしっかり行えること、等の規則正しく計画性のある生活に関する内容が最も多い回答であった。生活的自立度に分類できると判断した回答については在学生と卒業生との間に違いがあり、卒業生では「継続的に貯金している」というような将来に備えた金銭的な蓄えをしているかという回答が多く見られたが、在学生ではまったく見られなかった。これは、在学生と卒業生とでは収入に差があり、在学生にとって自分の収入から貯金を行うことが現実的でない可能性や、在学生は社会人に比べ必要に応じて親からの金

銭的援助を受けられる環境にあることから貯金の必要性が低く、回答として浮かんでこなかった可能性が考えられる。

次に経済的自立について見ると、アルバイトをしていること、という仕事に関する側面と、自分の収入で生活できること、金銭管理ができること、という収入に関する側面の回答が多く見られた。どちらの側面についても、在學生と卒業生とで回答に細かな違いが見られた。仕事に関する側面においては「仕事」の内容として、在學生では学生の回答として当然の結果ではあるが「アルバイトをしている」ことのみが挙げられ、卒業生では「就職している」ことのみが挙げられ、「正規雇用」という言葉も見られた。「就職」という言葉が、一般的には社員になることに対して使用されることから、自立している者の仕事内容として、多くの卒業生がアルバイトやパートはあてはまらないと認識しており、一部では非正規雇用であることもあてはまらないと認識されていることが考えられる。収入に関する側面においては、自分の収入のみでできることについて、在學生では「自分の欲しいものを買える」から「全てまかなえる」まで幅広い内容が挙げられたが、卒業生では「生活に必要な全てを賄える」ことのみが挙げられていた。よって、在學生には実現可能な基準から望ましい経済的自立をとらえる者と、現在の自分にとって現実的ではないが、社会における一般的な基準から望ましい経済的自立をとらえる者がいると考えられる。

次に生活身辺処理的自立について見ると、一人暮らしができること、家事がこなせること、という二通りの内容が挙げられた。これらの回答について在學生と卒業生との間では大きな違いは見られなかったが、回答者により「家事」の基準について「生きていける最低限の」や「親と同じくらい」、「完璧に」といった違いが見られた。よって、自分で生きていけることを自立ととらえ、豊かな暮らしはその先に実現されるものだと考えている者と、自分で豊かな暮らしを保って生きていけることを自立ととらえている者がいるということがわかる。回答形式が自由記述であることから、単に家事がこなせることを自立としており具体的な基準については回答していない者が数多くいるため、相関を見て明確に述べることはできないが、この基準の違いは生活身辺処理的自立の度合いに影響していると考えられる。

次に親からの自立について見ると、親に頼らず行動できること、親がいなくても自分の暮らしを保てること、等という親の援助に関する内容と、親子が互いに他人で一個人であると認めること、互いに尊敬し合えること、等という親子の関係に関する内容が多く見られた。これらの回答については在學生と卒業生との間では大きな違いは見られなかった。

以上より、現在の大学生が理想とする「自立」は大まかに以下のようにとらえられる。

精神的には自分の確固たる考えを持ち、その考えを基に物事を決定したり行動に移すこ

とができ、かつ言動に責任を持っている。生活的には健康的な規則正しい生活をしており、時間管理ができ計画性のある生活をしている。経済的にはアルバイトをしており、自分の収入である程度の出費をまかなうことができ、かつ収支を管理できる。生活身辺処理については一人暮らしができ、生活が成り立つだけの家事をこなせる。親との関係については互いを一個人として尊敬し合っており、親を頼りにしなくても行動でき暮らしていける。

また、個人により「家事」や「生活」等の内容の基準に差が見られるものの、これらの性格が異なる事柄を幅広く達成している状態であるほど、大学生が思う望ましい自立の状態であると考えられる。

第2節 大学生の自立達成に向けて

近年、定職に就かず自立しない若者が問題視され、ニートやフリーター、引きこもりといった言葉が若者当人たちにとっても身近なものになっている。親離れ子離れの問題に触れつつ日本の家族問題を指摘する書籍がベストセラー入りするなど、家族問題の一つとしても自立の問題が世間の注目を集める中、大学生にとっても「自立できない問題」は無関係ではない。大卒の8人に1人が非正規雇用職、フリーター、無職のいずれかにあたるという現状があり、在学生についても、何に対しても親を頼りにできると考え自主性が乏しい傾向があると指摘されている。自立とは、「何日を迎えたら何歳になる」というように「この時期を迎えたら自立する」といった単純なものではなく、どのような時期に自立にさしかかるのか、何をもって自立していると判断するのかということは、そのときの文化や社会背景、人によって異なる。よって、卒業して学生期間を終えた途端に自立するという単純なものではないことから、現在の大学生の自立過程が学卒後の自立にも影響を及ぼすと予想できる。このような考えから、大学生が学卒後の自立に向けて、どのようなことを意識して自立過程を進めば問題を抱えることなく自立できるのか検討するために、本論では大学生の自立と様々な要素の関係を見てきた。

アンケート調査の分析結果から、総合的な自立度が高い学生には以下のような特徴があることがわかった。

- ①主観的な親からの自立度が高い
- ②親への依存度が低い
- ③学校ではなく自主的に参加したコミュニティで得た友人と情緒的關係を築いている

- ④アルバイトをしている
- ⑤自分を律したり、何かをやり遂げたりする意志が強い（五因子の性格の勤勉性より）
- ⑥不安や緊張感をあまり強く抱かない（五因子の性格の神経症傾向より）

それでは、上記の特徴に該当しない学生はどのようなことを意識して自立過程を進めばいいのだろうか。分析結果からわかったことを提示していく。

まず①について、主観的な親からの自立度が低い傾向は、以下のような特徴がある人に見られることがわかっている。

- 1、母親とのコミュニケーション頻度が高い
- 2、親の経済的援助姿勢の基準が緩い
- 3、親からの干渉度合いが高い
- 4、アルバイトをしていない
- 5、実家暮らしである

1について、父親に比べ母親とのやり取りは心理的距離が近づくことに繋がりやすいと考えられるため、②とも関連して、心理的に依存した状態になっていないか母親との関係を振り返ることが重要と考えられる。母親と仲が良く、連絡を取り合ったり一緒に出掛けることは良いことであるが、何事も報告したり意見を求めたりしていないか、一人で出掛けることに不安や寂しさを感じる状態になっていないか、など本人が関係を振り返り、過剰なコミュニケーションにならないよう意識することが重要と考えられる。

2と3については主に親側の問題であることから、学生本人が働きかけても容易には変えられない可能性がある。よって、5とも関連して、生活環境を変えることが重要だと考えられる。離家している人には、親からの自立度が高い傾向に加えて、親からの干渉度が低い傾向と、母親とのコミュニケーション頻度が低い傾向があった。よって、親と空間的距離を取ることで、親の価値観や言動を要因とした環境から影響を受けにくくなると考えられる。また、母親と生活の場が離れることで、食事や買い物など一緒にすることが当然になっていた行為があった場合、それらを一人で自主的に行う機会を得ることも期待できる。したがって、親からの自立度が低く、かつ実家暮らしの人については、離家が親からの自立に繋がると考えられる。加えて、実家暮らしの人ほど親からの生活身辺サポートを甘受してしまう傾向が見られたことから、家事などのサービス提供を担っているだろう母親と生活の場が離れることで、生活身辺处理的自立度を高めることも期待できる。

一方、離家している人の中で、親の経済的援助を受けていることを要因として自分は親から自立していないと思っている人がいる場合、離家以上に大きく環境を変えることは難しいため、4(④)とも関連して、自分の収入を頼りにすることで親の経済的援助に甘えた状態に陥らないよう意識することが重要だと考えられる。

次に③について、大学生にとって自立過程における人間関係で重要なのは、両親や恋人ではなく友人と情緒的關係を築くことであった。特に、誰もが属する大学ではなく、自主的に参加したコミュニティにおいて積極的に交流を重ねることで得た友人と深く情緒的關係を築くことが自立に繋がっていた。つまり、大学とは別のコミュニティに属し、単に会話をしたり行動を共にしたりするような関係でなく、気を許し合い互いを理解し合えるような情緒的關係を築くことが重要だと考えられる。よって、一つの例として、学外の人と活動するようなサークルに属したり、ボランティア活動などの課外活動に参加してみたりすることは、大学生の自立に繋がることだと考えられる。また、④と関連して、アルバイト先を大学から離れたところに変えてみたり、一つのアルバイト先で継続して働いて同僚と中を深めたりすることも、例に挙げられる。調査において、「アルバイトをしていること」と「学外の友人と情緒的關係を築いていること」に有意な相関は見られなかったが、アルバイト先が自主的に参加するコミュニティの一つであることと、友人となり得る相手との出会いがあり、当人が積極的に交流しようと思えばそれが可能な場であることから、自立に繋がる情緒的關係を得られる機会としてアルバイトにも期待できると考えられる。このことは、今回の調査の質問では扱わなかった「アルバイト先の人間関係」や「同じアルバイト先での勤務継続期間」などの項目を加えることで、明らかにできたのではないかと考えられる。

以上より、岩上（2010）が「現在の若者の自立過程では個人ごとの状況や選択へ、個人ごとに適応することが求められている」と述べたように、現在の大学生の自立過程もまた、個人ごとに状況が異なり、望ましいと思う自立のあり方にもやや基準の違いがあり、よって現在自立過程のどの辺りに位置するかにも違いが見られた。家庭環境やどの要素の自立度が低いか異なれば、望ましい自立により近づくために取り組めることが異なり、望ましいと思う自立のあり方を厳しい基準で捉えていけば、自立過程においてより「自立」から遠くに位置しているように見られ、当人もまたそのように認識する。本節ではこれを踏まえて、現在の大学生の個人ごとの状況や選択への個人ごとの適応のしかたを、いくつかの例として提示することができたと思う。本論が大学生の自立過程をより「望ましい自立」に近づけるための一例として参考になればいいと思う。

おわりに

若者が自立できない問題は数多く指摘されており、現在の大学生についても学生期間を終えれば途端に自立するとは期待できない。現在の自立過程が学卒後の自立にも影響を及

ぼすと予想できることから、学卒後に自立の問題を抱えないよう意識しながら現在の自立過程を進むことが重要だと言える。本論ではアンケート調査の結果から、一人一人が考える「望ましい自立のあり方」が多様なことが示された一方で、それらは複数の先行研究で予想されていたように、精神面、生活面、経済面、社会面などの分類に対応したものであることもわかった。また、自立の複数の側面や、自立の度合いを高める要素は、それぞれに満たされるべき必要不可欠なものというよりは、ある要素が満たされていれば他の要素の重要性が低くなるような、柔軟な相補的な関係にあることもわかった。これは結果として、岩上(2010)が述べた「状況や選択への個人ごとの適応のしかた」と言える。

具体的に述べると、学生本人が「自分は親から自立している」と思えることや親への依存度が低いことが、複数の要素からとらえられる「自立」の度合いを高めていた。よって、コミュニケーションが増えるほど心理的距離が近づきやすい母親との関係を中心に、親との関係が心理的に依存した状態になっていないか振り返り、親から自立するよう意識することが重要だと考える。また、本人に対する干渉度合いや援助の姿勢という親側の要因が親からの自立度を低めていたことから、離家して親と空間的距離を取ることで親の影響を受けにくい環境に生活の場を変えることも重要と言える。さらに、本人に気を許し合えるような情緒的関係を築いている友人がいること、またその関係性が深いことが「自立」の度合いを高めていた。特に、学校以外の場で得た友人と深く情緒的関係を築いているほど自立度が高い傾向が見られた。よって、大学とは別のコミュニティに属し、新たな人間関係の中で積極的に交流し、気を許し合い互いを理解し合えるような関係を築くことが重要だと考える。

複数の要素について「自立」の度合いを高める影響が見られたが、先に述べたように、本人にとってこうした要素を全てそろえることが必要というわけではなく、ある要素が不足しているかどうかにより他の要素の重要性が変化していた。つまり、自立にとって有利な要因を、何か一つでも自身の強みとして持っていれば、自立の度合いが高まると言える。したがって、どの学生についても当てはまるような、「これを意識していれば自立に繋がる」と断言できる要素はないということになり、大学生にとって、自分に合った自立のしかたを模索することが重要であり、自分の強みを伸ばすか、不足している部分を補うかは、個々人の選択に任せられると考えられる。

「自立」は、どのような時期に自立にさしかかるのか、何をもって自立していると判断するのかということが、そのときの文化や社会背景、人によって異なるという曖昧性を有する概念である。現在の大学生にとって「自立」が具体的にはどのような要素から成り立つと認識されているのか、また、一人前としての「大人」や「成人」を終着点とする自立過程について、どのようなことを意識すれば問題を抱えることなく進んでいけるのか、ということを検討し論じることができたことで、本論の目的はおおむね果たすことができたと言える。

しかし、アンケート調査を授業内と Google フォームの二種類の方法で実施したものの、

後者から得られた回答数が少なくなってしまうことと、実施を依頼した授業が教育学部の授業に偏っていたことから、回答者の性別に偏りができ、男子生徒のサンプルが少なくなってしまう。本論では「自立」に関係する要素として、田中（2010）が先行研究でまとめている二つの情緒的人間関係の移行モデルについても見ていたが、上手く分析できなかった。また、田中の調査において、あてはまる移行モデルに男女差が見られていたことについて、本論で大学生の男女にも同じ傾向が見られるのか分析したが、大きな男女差は見られず、分析も上手くいかなかったように感じる。後者については、田中の調査で見られた男女差が単なる性別を要因とした差ではなく、収入の高い男性と低い女性という経済的側面を要因とした差だったのではないかという可能性を提示したが、男子生徒のサンプルが少ない本論の調査からは、明確な指摘は行えず、また現状を明らかにすることもできず課題が残った。さらに、多くの先行研究と同様に本論の調査結果からも、若者の自立過程が多様化・個別化しており、のぞましい自立を達成するための道すじや取り組みが何通りにも分かれ複雑化しているとわかった。本論で提示した自立達成への道すじや取り組みはほんの一例である。したがって、大学生の自立過程について、男女比が等しくなるような環境でより多くのサンプルを集めて調査分析することで、本論では明確にできなかった情緒的人間関係の移行モデルと大学生の自立の関係や、発見できず扱われなかった個別の状況や選択への適応のしかたなど、新たな発見が見出されることを期待したい。

謝辞

本論文の作成にあたり、指導していただいた小原一馬先生と、授業前後でのアンケートの実施に快くご協力いただいた黒川享子先生、杉田明子先生、アンケートの回答に時間を割いてご協力いただいた宇都宮大学の学生の皆さま、卒業生の皆さまに感謝申し上げます。

参考文献

- 岩上真珠（2010）『＜若者と親＞の社会学 未婚期の自立を考える』、青弓社
岩上真珠「序章 未婚期の長期化と若者の自立」、7－16 頁
安藤由美「第1章 戦後日本の成人期への移行の変容」、22－40 頁

- 中西泰子「第2章 若者の親子関係とその経済的背景にみるジェンダー」、45-59 頁
- 田中慶子「第3章 未婚者のサポート・ネットワークと自立」、65-78 頁
- 米村千代「第4章 親との同居と自意識—親子関係の'良好さ'と葛藤」、83-101 頁
- 嶋崎尚子「第5章 移行期における空間的距離と親子関係—近代的親子関係の再考」、105-120 頁
- 岩上真珠「第8章 ハイ・モダニティ時代の若者の自立—リスク社会のなかで」、169-185 頁
- 山田昌弘 (2005) 『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』、180-194 頁、有斐閣
内閣府「若年層の意識実態調査」(2003)
- 山田昌弘 (1999) 『パラサイト・シングル時代』、筑摩書房
- 下重暁子 (2015) 『家族という病』、幻冬舎
- 下重暁子 (2016) 『家族という病2』、幻冬舎
- 宮本みち子 (2004) 『ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と形の変容』、勁草書房
- ジョン・A・クローセン (2000) 『ライフコースの社会学』新装版、佐藤慶幸/小島訳、早稲田大学出版部、157-158 頁
- 柏木恵子(編) (1993) 『父親の発達心理学—父性の現在とその周辺』川島書店
- 森岡清美監修『家族社会学の展開』
- 正岡寛司 (1993) 「ライフコースにおける親子関係の発達的变化」、65-77 頁
- 白井利明 (2006) 『青年期はいつか「よくわかる青年心理学」』、ミネルヴァ書房
- 大石美佳、松永しのぶ (2008) 「大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成—」、鎌倉女子大学家政学部 昭和女子大学大学院生活機構研究科、日本家政学会誌、59、7、461-469 頁
- 岩上真珠 (2005) 「少子・高齢化社会における成人親子関係のライフコース的研究—20代-50代：1991-2001年」、2001-04年文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
家計経済研究所編 (宮本みち子、岩上真珠、山田昌弘、米村千代) (1994) 「脱青年期の出現と親子関係—経済・行動・情緒・規範のゆくえ」、家計経済研究所
- ポスト青年期研究会編 (2004) 「親からみた20代未婚者の仕事・結婚・親子関係—成人期への移行」に関する調査研究 PartIII」、ポスト青年期研究会
- 高坂康雅、戸田弘二 (2003) 「青年期における心理的自立 (I) —「心理的自立」概念の検討」、北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要、4、135-144 頁
- 高坂康雅、戸田弘二 (2006) 「青年期における心理的自立 (II) —心理的自立尺度の作成」、北海道教育大学紀要 (教育科学編)、56、17-30 頁
- 渡邊恵子(1991b) 「自立と自己の性の受容—女子大学生の場合—」、日本女子大学紀要人間社会学部、2、83-95 頁
- 渡邊恵子(1992) 「自立と自己の性の受容(2)—性差の検討—」、日本女子大学紀要人間社会学部、3、1-14 頁

- 福島朋子（1992）「思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び性差の検討—」、発達研究、8、67—87 頁
- 福島朋子（1993）「自立に関する概念的考察—青年・成人及び女性を中心として—」、発達研究、9、73—8 頁
- 福島朋子（1996）「成人における自立観—概念構成と性差・年齢差」、仙台白百合女子大学紀要、1、15—26 頁
- 水本深喜、山根律子（2010）「青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味—精神的自立・精神的適応との関連性から」、発達心理学研究、21、254—265 頁
- 水本深喜（2018）「青年期後期の子の親との関係—精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差—」、教育心理学研究、66、111—126 頁
- 小塩真司、阿部晋吾、カトローニ ピノ（2012）「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み」、パーソナリティ研究、21、40—52 頁
- 前田直樹、長友真実、田中陽子、三浦宏子（2007）「福祉系大学生における共依存と心理的健康」、九州保健福祉大学研究紀要、8、79—87 頁

参考 URL

NHK オンライン

<https://www.nhk.or.jp/>

内閣府ウェブサイト「内閣府の政策—少子化対策 未婚化の進行」
資料：総務省「国勢調査」

<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/mikonritsu.html>

総務省統計局ウェブサイト「統計図書館・統計相談—16A - Q09 フリーターの人数」

<http://www.stat.go.jp/library/faq/faq16/faq16a09.html>

西文彦（2017）「親と同居の未婚者の最近の状況（2016年）」、総務省統計研修所

<http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/parasi16.pdf>

文部科学省（2017）報道発表「平成 29 年度学校基本調査（確定値）の公表について」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/02/05/138863_9_1.pdf

ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室（2016）「第 3 回 大学生の学習・生活実態調査報告書 ダイジェスト版 [2016 年]」2、6—10

https://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_03.pdf

総務省統計局（2012）「平成 24 年就業構造基本調査」

<https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2012/pdf/kgaiyou.pdf>

総務省統計局統計調査部国勢統計課（2007）「国勢調査 / 平成 2 年国勢調査 / 第 1 次基本集計 全国編」

<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0000031335>

総務省統計局統計調査部国勢統計課（2007）「国勢調査 / 平成 7 年国勢調査 / 第 3 次基本集計 全国編」

<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0000032410>

総務省統計局統計調査部国勢統計課（2007）「国勢調査 / 平成 12 年国勢調査 / 第 2 次基本集計（労働力状態、就業背やの産業、就業時間など） 全国結果」

<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0000033097>

調査資料（質問紙）

「家族との関係性が大学生に与える影響に関する調査」

【調査の目的】

私は現在、家族や周囲の親しい人との関係性や距離が大学生に与える影響について、卒業論文を作成しております。ここから得られた回答は研究目的のみに用い、プライバシーには最大限注意いたします。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

【記入にあたってのお願い】

特に断りのない限り、あてはまる数字 1 つに○をつけてください。また、自由記述の欄については簡単で結構ですので、思い浮かぶことを書いてください。

学部（ ）

学年（ ）年 性別（ 男 ・ 女 ）

A-1) あなたの現在の考えや状態についての質問です。

1. かなりあてはまる 2. ややあてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない として、より自分に近い番号に丸をつけてください。

(ア) 人には人の、自分には自分の考えや意見がある	1 2 3 4
(イ) 周囲の様々な人とよい関係を維持している	1 2 3 4
(ウ) 将来に備えた蓄え（貯金、生活に役立つ勉強など）を <u>していない</u>	1 2 3 4
(エ) 相手の気持ちを考えながら発言、行動している	1 2 3 4
(オ) 自分の行動にともなう責任を考えながら行動している	1 2 3 4
(カ) 規則正しい生活を <u>していない</u>	1 2 3 4
(キ) 自分で使うお金の収支を把握している	1 2 3 4

(ク) 自分の意見や行動が人と違っても、自分で決めて貫いている	1 2 3 4
(ケ) 日頃の自分の食事は、栄養バランスを考えたうえで自分で作っている	1 2 3 4
(コ) 自分で部屋の掃除を定期的に行っている	1 2 3 4
(サ) 自分の洗濯物も、家族や同居人に洗濯してもらっている	1 2 3 4
(シ) アルバイトをしていない	1 2 3 4
(ス) 欲しいものは自分で働いて得た収入のみで買っている	1 2 3 4
(セ) 親から経済的援助を受ける（受けている）場合、返済する約束のもと援助を受ける（受けている）	1 2 3 4
(ソ) 自分一人でやっていけるという自信がない	1 2 3 4
(タ) 過去の間関係の失敗から学ぶことが少なく、同じことを繰り返すことが多い	1 2 3 4
(チ) 相手を喜ばせようとして相手に合わせることもある	1 2 3 4
(ツ) 相手の気持ちを敏感に察知して、先のことを考えすぎてしまうことがある	1 2 3 4
(テ) 「ノー」と言えず、頼みごとをつい引き受けてしまうことがある	1 2 3 4
(ト) 問題を感じる相手や人間関係に巻き込まれることがある	1 2 3 4

(ナ) あなたの現在の居住形態はどのようなものですか？

1. 実家暮らし 2. 一人暮らし 3. 家族以外の他人と同居

(ニ) 現在の居住形態について、あなたの考えに近い方はどちらですか？

1. 満足していて、変えるつもりはない 2. 不満があり、変えたい

(ヌ) (ナ) で実家暮らしと答え方に質問です。以前に実家を離れて暮らしていた経験がありますか？

1. はい 2. いいえ

(ネ) (ナ) で実家暮らしと答え方に質問です。将来実家を離れて暮らす場合、いつ頃実家を離れますか？

1. 就職（卒業）したとき 2. 結婚したとき 3. 必要な資金が用意できたとき
4. その他【 】とき 4. 実家を離れる予定はない

(ノ) (ナ) で一人暮らし、または他人と同居と答えた方に質問です。実家を離れた理由はどのようなものですか？あてはまるもの全てに○をつけてください。

1. 実家からでは大学に通うことが困難なため
2. 親から離れて、独立した生活をしたいため
3. 一人の生活（あるいは、同居している相手との生活）をしたいため

③能力や努力を高く評価してくれる						
④一緒にいて楽しく時間を過ごせる						
⑤助言やアドバイスをしてくれる						
⑥遊びに誘うと気軽に応じてくれる						

C-1) あなたとあなたの両親の現在の状態についての質問です。

1. かなりあてはまる 2. ややあてはまる 3. あまりあてはまらない 4. まったくあてはまらない として、より自分に近い番号に丸をつけてください。

(ア) 親は私を信頼してくれている	1 2 3 4
(イ) 親の生き方を支持している	1 2 3 4
(ウ) 私には親とは異なる独立した考えがある	1 2 3 4
(エ) 親の考えや期待にとらわれることなく行動している	1 2 3 4
(オ) 親と私は、他人に対してよりもお互いに対して親しみを感じている	1 2 3 4
(カ) 親の立場や気持ちを理解して親に接している	1 2 3 4
(キ) 自分に余裕がないときも親を気づかうことができる	1 2 3 4
(ク) 自分の意見や行動に親が賛成していないとき、不安を感じる	1 2 3 4
(ケ) 親からどう評価されるか気になる	1 2 3 4
(コ) 親のアドバイスに従わないと後ろめたい気がする	1 2 3 4
(サ) 親に相談せずには、自分で決心できないことがある	1 2 3 4
(シ) 自分と親との関係は良好だと思う	1 2 3 4
(ス) 自分が親から精神的に自立していると思う	1 2 3 4

(セ) (ス) で1、2の「あてはまる」と回答した方に質問です。いつ頃、どのようなことを主なきっかけとして、親から精神的に自立したと思いますか？最もあてはまるもの1つに○をつけてください。

1. 大学受験 2. 大学入学 3. (大学入学後)実家を離れた 4. アルバイトを始めた

2. 学費など基本的・最低限の費用を出し、状況や交渉によってはそれ以上の援助もする
3. 学費など基本的・最低限の費用は出すが、それ以上の援助はしない
4. 援助はほとんどしない

(キ) あなたの親は、あなたへのサービス提供（家事を負担してくれる、あなたが必要とする手続きを代わりにしてくれる等）をどのような姿勢で行っていますか？

1. 可能なかぎりのサービスを提供する
2. 決まったサービスを提供し、状況や交渉によってはそれ以上（それ以外）のサービス提供もする
2. 決まったサービスは提供するが、それ以上（それ以外）のサービス提供はしない
3. サービス提供はほとんどしない

(ク) あなたの親は、次の三つの側面についてどの程度あなたに干渉してきますか？

① 金 銭 面	1. かなり干渉してくる	2. やや干渉してくる
	3. あまり干渉してこない	4. 干渉してこない
② 生活時間	1. かなり干渉してくる	2. やや干渉してくる
	3. あまり干渉してこない	4. 干渉してこない
③ 交友関係	1. かなり干渉してくる	2. やや干渉してくる
	3. あまり干渉してこない	4. 干渉してこない

(ケ) あなたの親の暮らし向きは、次のどちらに近いですか？

1. 経済的に余裕がある暮らし向き
2. 経済的に余裕のない暮らし向き

(コ) あなたの父親の最終学歴を教えてください

1. 大学（4大、大学院）
2. 短大・高専・専門学校
3. 高校
4. 中学校
5. わからない

(サ) あなたの母親の最終学歴を教えてください

1. 大学（4大、大学院）
2. 短大・高専・専門学校
3. 高校
4. 中学校
5. わからない

D) あなた自身の親に対する考えについての質問です。

最後に、親との関係や、親に対するあなたの気持ちが変わった経験があれば、いつ頃どのような変化があったか教えてください。



以上で質問は終わりです。ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

教育学部 総合人間形成課程 地域公共領域 4年 古堀晴菜

担当教員 小原一馬